

公開 FD ワークショップ'15 表現教育の可能性（第 6 回）

表現教育の可能性 — 日本語教育（上級）の現場から —

安 部 達 雄

【阿部】 みなさんこんにちは。開始時刻となりましたので、ワークショップを開催させていただきます。

本日は、成城大学共通教育研究センター主催の公開 FD ワークショップ『表現教育の可能性』にお越しいただきありがとうございます。今日は降雪の予報が出ていましたが、今のところは足元も悪くなさそうなものの、もしこれから雪が降ってきたら、お帰りが大変かもしれないと思います。そのような天候の中、そして学期末のお忙しい中、たくさんの方々にお集まりいただきまして、とてもありがたく思います。

申し遅れましたが、私、本日のワークショップの司会とコーディネーターをさせていただきます、本学経済学部の阿部勘一と申します。よろしく願いいたします。

このワークショップの趣旨については、チラシやホームページに書かれておりますが、ここで改めて説明したいと思います。このワークショップは、本学の初年次教育科目で、「Write = 書く・Read = 読む・Debate = 議論する」の頭文字を取って WRD（ワード）という科目を運営するにあたって、授業の方法や、WRD 科目の内容を中心とした初年次教育に関する様々な問題について議論しようという趣旨で始まりました。これまで 4 回開催しておりまして、今回が 5 回目となりま

す。なお、これまでのワークショップにつきましては、本センターで発行しております紀要『成城大学 共通教育論集』に、紙上再録を掲載しております。過去の紙上再録が掲載されている論集をお渡ししておりますので、みなさんには少々荷物になりまして恐縮ですが、ご参考までにご覧いただければ幸いです。

それから、1つ事務的な連絡をさせていただきたいのですが、お渡しした袋の中にアンケートが入っていると思いますので、よろしければお書きいただいて、お帰りの際にご提出いただければと思います。

今回のワークショップですが、毎年、『表現教育の可能性』というタイトルにサブタイトルをつけてテーマを示しておりますが、今回は『日本語教育の現場から』ということで、実際に日本語をどう教えるかというテーマに取り組んでいらっしゃる先生にお話していただこうと考えまして、講師の先生をお願いをいたしました。

今回の講師は、安部達雄先生です。安部達雄先生は、早稲田大学大学院の日本語日本文化専攻博士課程を単位取得満期退学されております。専門は言語学ですが、落語などに代表される「笑い」について、言語学の見地から研究している数少ない研究者でもいらっしゃいます。

実は、ここで私は、「安部達雄先生」とご紹介申し上げています。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、安部先生は、「サンキュータツオ」という芸名で、プロの漫才師としても活躍されています。「サンキュータツオ」のお名前でもテレビやラジオに出演されていたり、岩波書店の雑誌『世界』をはじめ、新聞でも文章をお見かけします。その傍ら、一橋大学の非常勤講師として、留学生を対象にした日本語の授業や、ご自身の専門に関連する講義もされています。安部先生の著書や論文については、お手持ちのリーフレットに書かれている通りです。私は、『ヘンな論文』（角川学芸出版）を読ませていただいたのですが、とても面白い企画と内容で、テレビ朝日で放送されている『タモリ倶楽部』を視ているようで、とても興味深く読ませていただきました。このように著書や論文も多数あり、新聞や週刊誌等でも連載をお持ちの先生です。

では、さっそく、安部達雄先生にご講演いただければと思います。ここからは、安部先生にマイクをお渡ししたいと思います。

【安部】 今日は対話形式じゃないのですか。なんか、寂しいですね。質問があれば受け付けますよ。

【阿部】 お話をうかがった後でまとめてと思ったのですが…。

【安部】 いいですよ。今聞いてください。しゃべる前に何か。

【阿部】 しゃべる前ですか？いやあ、今は特に何も考えていませんでしたね…。

【安部】 僕が一橋大学で教えるようになったのは2008年からなので、今週、ちょうど丸8年目が終わったところですね。毎回のことですが、ひとつの Semester が終わった。今、とても晴れやかな気持ちです。1 Semester、16 週授業をしたわけですね。

僕が教えているのは、いろんな国から来ている留学生の中でも、いわゆる日本語レベルが中級後半から上級後半です。上級というのは、日本の中学校を卒業した日本人くらいはできるレベルです。なんだったら高校生以上の語彙力はある。けれども、助詞のミスやセンテンス、アスペクトのミスがたまにあるくらい感じの子たちですね。そういう子たちに文章表現、実践的な文章が書けるところまで引き上げてくださいというタスクがありまして、授業をやっているという感じですかね。

【阿部】 日本の中高校生レベルというと、留学生にしてはかなり高いレベルではないでしょうか。

【安部】 そうですね。そういった意味ではボキャブラリーは豊富なのですが、運用がまだ稚拙なのです。だから、出てくる文章が非常にアンバランスでとても面白い「ファンタスティックな文章」がたくさん出てきます。

【阿部】 では、そのような授業を担当されての経験も踏まえて、いろいろな事例

をご紹介いただきながらお話をいただけるということでもよろしいでしょうか。

【安部】 聞きながら質問があったら、その場で聞いてください。

【阿部】 わかりました。黙って聴いていようかと思っていたのですが、もし何かあれば質問させていただきます。後半にも討論の場を設けていますので、今日お集りの方々も含め、後半でもいろいろ議論できればと思います。

外国人日本語学習者の「ファンタスティックな文章」

【安部】 そうですね。よろしくお願いいたします。

私が教えている中級後半から上級の日本語学習者とはどのような人かという、日本語の文法だけが得意で文章が得意ではない人、つまり、センテンスは書けてもパラグラフが書けないとか、文章を書くのは得意だが日本語が追いついていない人ですね。つまり、自分の国の言語だったら自由に思ったことを書けるけれども、語学力が追いついていないという人と、もっと俗っぽく言うと、母国ではそこそこ頭がいい人。これは、今日の話の中でもちょっと鍵になってくるのですが、エリートが受ける文章教育を受けている人の頭を柔らかくする作業のほうですが、そういう教育をまったく受けていない人よりも、実は世界共通で結構難しかったりもするのです。それと、初級、中級でも文章表現の授業を受けているレベルの人たちを教えております。したがって、ほぼ日本の大学生と同じ能力で、文法だけが少し問題があるというような学生だと思っていただければと思います。授業に臨むモチベーションは、日本の大学生よりちょっと高いかもしれないですね。悪い成績を取って国に帰れないという人も何人かいるという感じでしょうか。

今日は『日本語教育の現場から』ということでございますので、うつらうつら聞いていただければいいかなと思います。パワーポイントも使ってまいりますので、気になったところだけメモしていただければと思います。

例えば、日本語のレベルが上級前半の学生は、どのような文章を書いてくるのか。先ほど「ファンタスティックな文章」と言いましたが、例えばこういう文章

ですね。

センテンスでも問題のある場合があります、例えばスライドの一番上の文だと、「初めて日本で車に会った時に、すぐに止めて車の通りを待っていた。」…いやあ、言いたいことはわかるのだけれど…。じゃ、どこをどう直せばいいのか、最初は面食らうかと思いますが…、おそらく言いたいのは、「初めて日本で車を見かけた時、多分自分の国だったら歩行者を待つという文化がないのだけれども、日本では歩行者を優先してくれる。なんて素晴らしい国なんだ。」ということだと思います。日本で車を見かけたときに、私はすぐに止まって車が通り過ぎるのを待っていた、ということなのですね。このようなセンテンスから見えてくるのは、まず動詞の問題ですね。車を見かけたことを「車に会った」と言うことであるとか、「すぐに止めて」と言うこととこれは他動詞になるんですが、ここでの動作主は私なので、「すぐに止まって、車が通り過ぎるのを待っていた」となりますね。

そして、車が通り過ぎるのを「車の通り」と言うってしまうわけです。「…が通り過ぎる」という表現を知らないとか、「私はすぐに止まって」という表現があるとか…、基本的にはこの文の主格はずっと「私」なんですけれども、「立ち止まって」というような表現は、この人の中にはまだ無いんだなということが、なんとなくわかってくると思います。

ただ、このような文で何が見えてくるかというと、母国語で発想したものを日本語に出力しようとする、母語干渉をどれだけ受けているかという問題も入ってきていて、意味のわからない文になるということですね。これは、よく留学生にも説明しています。ほかにも「フランスやイタリアは世界中ファッションの天国といえば私にとって日本は絶対私のファッション天国だ。」と、「早口言葉か!」みたいな文章がでてくる。何となく言いたいことはわかるのですが、「世界中のファッションの天国と言ったらフランスやイタリアだが、私にとっては日本だ。」というのが自然な日本語の流れですが、おそらくファッションの天国の中にフランスやイタリアがあつて、私の中のファッションの天国に日本があるというような発想の仕方、関係代名詞のような、フォルダによって中を決めていくというようなことは外国語らしい発想だから気をつけましょうね、という話をしたりしま

す。

比較級もそうで、例えば次の例を見ると、「つまり日本では、伝統的な食べ物がよく食べる一方、海外食も伝統的な料理をよく食べているブルガリア人に対してよく食べられている。」…、もうよくわからないですよ。こういう、鈍器で脳みそを殴られるような文が毎週届くという感じですかね。「桃とトマトの形について考えましょう。両方丸くて柔らかい食事である。」…「何か変！」っていうね。例えば、食材、食事、ここのボキャブラリーを変えるだけでも文のイメージがずいぶん変わる。僕は国語辞典がわりと好きで、自宅に二百何十冊かありまして、実家に住んでいるので、親から早く捨ててと言われてはいますがそれでも、それはともかく、海外の留学生も、わからない言葉をまず自分の母国語で検索して、その翻訳に当たる日本語を国語辞典で探してそっくり入れてしまう。そうすると文体落差が生まれる、あるいは前後の文脈に関係ない語彙を入れてしまうわけです。辞書の弊害ですね。

で、日本語教育では、基本的には、まず語彙を覚えてもらう。そして、文型を覚えてもらう。そして、覚えた文型を使って文章を書いてもらう、というような段階を経ていきます。

ただ、やはり上達が進むにつれてこの教育方法にどうしても限界が出てくるのです。文型教育、あるいは日本の作文教育だと構成を教えると思いますが、尾括型とか頭括型のように一最初に結論を言うパターンとか、最後に結論を言うパターンですね—そのような文章の構造を最初に教えてしまうと、構造を意識した文章を一番に書いてしまう。あるいは構文を意識した文章を最初に書いてしまう傾向があるのです。

ですから、僕は、上級の学生には、「これ以上ボキャブラリーを増やす必要はない。今知っているボキャブラリーで、何とかして説明することを試みなさい。」ということを行っています。したがって、先ほども WRD というお話が出ていましたけれども、書く、読む、しゃべる、このことはどれも切り離せない問題なので、文章表現の授業ですが、僕の授業では、最初の 30 分はしゃべります。そして討論します。それで、学生が書いてきた文章を添削して学生に返却して、よかつた文章は受講学生でシェアをします。あるいは、同じレベルの人たちが失敗した

ミスもシェアして、「ここはこういうふうに修正するんだよ。」ということを毎週繰り返すわけです。これには「読む」という行為も含まれています。したがって、作文教育といっても、しゃべる、出力するということが大切なのです。思ったことをアウトプットすることにまず慣れて、またそれをシェアして読む、みんなで討論する、しゃべる。この3つの要素を授業に入れております。

作文教育というと、どうしても課題を与えて書いてもらってコメントして終わりにがちですが、僕の授業では、文章を書けるようになるためには実は読むという行為が重要だということをよく言っています。文章にミスが出てきたときには、頻発するミスを集めたテーマごとの小テストを授業の最初にやります。提出された作文の添削の中でよくやるミスを各個人に認識してもらおうということをやっております。頻発するミスだと…、呼応というのは陳述の副詞だけではなくて、「私は」から始まる文だと「…と思う」とか、そういうものを受けないと文として成立しないよといった例をたくさん挙げて、練習問題をやってもらっています。

読点についてですが、読点のルールは、日本の学校教育でもあまり説明されていないと思いますが、たまたま石黒圭先生（現在、国立国研究所教授）が一橋大学に教員として在籍されていたときに、石黒さんは読点の研究もなさっておられるので、そのご研究の成果を踏まえて、授業ではレトリックではなくて文法的に打たないとまずい読点の打ち方を教えております。留学生の場合、読点が上手く打てるようになれば、日本語の能力は上級だと言っていいと思います。読点は日本人でもなかなか上手く打てる人がいないので、読点の打ち方を見ればどれくらい日本語が書けるかというのがわかるポイントだと思います。

さて、文章表現に挑むうえでの問題を、このような文法的な問題をクリアしたうえで浮き彫りにしていくわけですが…、その前に共有しておきたい問題があります。それは、もともと自分の国の国語ができない人は、日本語を覚えたとしても国語ができないということなのですよね。なんと言うのでしょうか、自分の国の言葉で上手く文章が書けない人は、日本語を学んだとしても上手く文章が書けない。つまり、彼らが文章を書けないのは日本語教育のせいなのか、それともその国の国語教育のせいなのかかわからないのですが…、彼ら留学生が日本語の文章

を書けるようにならないと、とにかく教えている僕らのせいにされてしまうので、これは実は作文教育から始めないといけないのではないかという問題に気づきました。それで、今日は、この問題に対して、実際どのような授業をしているかをご説明したいと思います。

読み手と書き手の人数からみた文章の種類

僕は、「文章には4つの種類があることをまずは意識しなさい。」ということをして学生には言っています。①書く人が多くて読む人が多い文章、②書く人が多くて読む人が1人の文章、③書く人が1人で読む人が多い文章、④書く人が1人で読む人が1人の文章、の4つです。それぞれいろいろな書き方、つまり、書く人がどれくらいいて、読む人がどれくらいいるかということが、書く内容に反映されるということを言っています。例えば、①の書く人が多くて読む人が多いのは、メディアですと新聞や週刊誌、あるいは今ではネットもそうですね。それからSNS。これらは、書く人も読む人も多いものです。このように、文章を受け取る人がどれくらいいるか、受け取る側が1人だったらどういった書き方があるのか、そういうことを教えています。例えば、読む人が多い場合、どういうことを想定しなければいけないのか。自分の都合だけでは文章は書けない。自分と同じ立場の人がいるかもしれないし、自分と逆の立場の人がいるかもしれない。あるいは、自分と同じ日本語能力の人がいるかもしれないし、そうじゃない人もいるかもしれない。そのようなことを意識してもらっております。では、書く人が多くて読む人が1人の文章、これはどんな文章でしょうか。はい、阿部君、答えなさい。

【阿部】 はい。すぐに思いつくのは…、例えば授業のレポートでしょうか。

【安部】 はい、その通りです！これは、学校で出される宿題や授業のレポートですね。この4つの文章の中の1つの種類にしか過ぎませんが、学校教育では、書く人が多くて読む人が先生1人という文章を常に書いているわけです。つまり、学校教育では、②のような文章しか書けない人になってしまうということですね。しかも、②の文章というのは、就職のときに書く文章や、あるいは留学生の場合、奨学金をもらうときに書く文章にもなってくるのですが、このような文章

の場合、選ばれる文章を書かなければいけない。選ばれるためには、みんなと同じことを書きちゃいけない、ということを考えなければいけないことを意識してもらっています。

次に、③書く人が1人で読む人が多い文章。これは例えば小説ですね。いわゆる本もそうです。そして、④書く人が1人で読む人が1人の文章。これはメールなどですね。ただ、メールの場合、メーリングリストという③に含まれるものもありますね。

細かくいうと、多くの人が書く読むもののなかにも、不特定多数なのか、特定多数なのか、といったちがいがあっても、おいおい扱っていきます。

みなさんには、③の文章を練習してもらうためには、どのような文章の課題を出せばいいのかを考えてもらいたいです。僕は、③の文章の課題を最初にやってもらうときは、例えば「飲み会のお知らせのメールを書いてください。しかも、その1通だけで誰からも質問が来ないメールを書いてください。」という課題を出します。飲み会のお知らせメールを書くときにどのようなことを想定しなければならないかというところ、人によって気になるポイントがいろいろあるわけです。例えば、まず予算、お店、集合場所ですね。そして、遅れた場合は誰の名前で予約が入っている部屋に行けばいいのか。お酒は飲み放題なのか。お酒が飲めなくても行ってもいいのか。人によって事情が違うので、出てくる質問がまるで違います。それでも、読む人のことをきちんと考えた文章を書きなさいと言っています。読まれる人がいない文章は無いのだと、つまり独りよがりになるなという話をしています。

しかし、先ほども申した通り、エリート教育を受けている人たちは、どちらかというと独りよがりな文章を書く傾向があります。これがとても手間がかかるというか、自分と同じレベルの知性を持った人にしか伝わらない文章を書いてしまうのですが…。そのような学生にはあえて言いますが…、「バカも読むよ。」ということをよく言っています。例えば、「あなたは、もしかしたら会社で責任のある地位に就くかもしれないけれど、そうじゃない人たちも読むわけだから、いろいろな事情を持った人に響く文章、あるいはそのようなことに配慮している文章を最初に書くべきだ。」と言います。

こんな課題も出したことがあります。

渋谷駅に12歳の子どもがひとりでいます。その子に、このメールさえ読めれば一橋大学まで1人で来られるという文章を書いてください。

ここで書く前に必ず意識しなければならないのは、これは、「④書く人が1人で読む人が1人の文章だ」ということです。そして、読む人は子どもでもあります。つまり、難しい漢字は読めないわけです。あるいは、山手線に乗る場合、内回り外回りの概念がわからないかもしれない。そして、中央線の場合、中央特快に乗ってしまい、最寄りの国立駅を通過してしまうかもしれない。では、各駅に停まる総武線に乗るように指示すると、三鷹で止まってしまう。つまり、書く前にいろいろ想像しなければいけないことがある。どのように説明すれば1人で確実に来られるかというような文章を書いてもらうわけです。

文章を書くための3つの工夫

僕は、文章を書くうえでの3つの法則というのを、授業で毎週言っています。先ほどの飲み会のお知らせメールや、子どもに一橋大学までの道順を教える文章の課題では、次の(1)(2)(3)は何かということを考えてから文章を書いてくださいと話しています。

- (1) 何を聞かれているのかを知る。課題をよく読み込んでください。
- (2) どんな人が読むのかを想像する。読む人をよく想像してください。
- (3) 文章にどのような工夫を施すか考える。文章に工夫をしてください。

多くの学校教育では、特に(3)を教えていくわけですね。僕も文体論を研究しているので、(3)についてはずっと研究していたのですが、実は、文章を書こうとしたときに、なぜその表現をとったのかは大事になってくるので、本当はまずその表現を使った真意を知らなきゃいけないわけです。例えば、「飲み会のお

知らせのメールかあ」と思ったときに、まず何を書けばいいのか。1回も質問が来ないメールというと、そのメール1通で完結しないといけないので、どのような質問がくるかなあと。「あ、まず予算だわ。」と。そして、「どんな人が来るかも考えないといけないなあ。」「宗教上の理由で食べられないものがある人がいるかもしれないし、ベジタリアンもいるかもしれないから、何を食べるかも書かなきゃいけないなあ。」「遅れた人は、誰の名前で予約しているか知りたいかもしれない。」等々…と、このようなことを考えてから文章にしなさいと言っています。これは「(2) どんな人が読むのかを想像する」こととも関係しています。

先ほどの「子どもにもわかるように一橋大学に来られる文章を書いてください。」といった場合は、「子どもはどこまで理解力があるのかを、自分で想定しなきゃいけないよ。」と言います。「成城大学まで来てください。」という課題を出すにしても、同じ内容だけれど大人が読むのか子どもが読むのかで書き方が変わりますよね。そういったことも含めて、読まない人はいないのです。必ず読む人がいるのです。日記にも読者はいます。最初の読者は自分です。メモも最初の読者は自分です。つまり、時間が経った後の自分が読んだときに理解できるような情報を書かなければならないのです。僕は、文章を書くときには、何が必要な情報なのかを整理したうえで書きましようと言っています。

実は、作文教育には(1)(2)がすっぽりと抜けていると思っています。これは、僕の経験上、全世界共通です。多分、読む人のことをどれだけ想像するかについて、どの国の高等教育でもあまり言っていないんじゃないかなというくらい、すべての国の留学生が(1)と(2)を怠っているし、僕は日本人も非常勤で教えていたことがあるんですけども、やはり日本人の大学生でもそうでした。では、この3つの要素が必ず含まれている課題を出せばいいのかということそうではない。真面目な文章を書くことや、新聞記事を書くことを目的としているわけではなくて、あくまでも自分の考えを自分の言葉で出力できるようになることを目的としているはずですよね、文章表現というのは。ただ、学校で、特に大学で教えるとなると、どうしても真面目な課題を出しがちなわけです。これがまた別の問題を生んでいると僕は思っています。文章を書くことは、体力練習とかマラソンの走り込みのようなもので…、レポートや論文を書く、これははっきり言ってフルマラソ

ンですよ。今日も会場に来る途中、この下の階で卒論の口頭試問を待っている学生を見て胸が痛みましたけれども…、卒業論文ってね、22歳くらいの子からしたらフルマラソンですよ。1回も走ったことが無い人に、いきなりフルマラソンをやれと言っても無理ですよ。そのために、レポートとか、段階を経て卒業論文というものを仕上げるわけで、とにかくどんなに文型を教えようが、どんなにボキャブラリーを教えようが、まずは書かないことには上達しないというのが僕の考え方です。先生によっては、2週に1回、3週に1回文章を書いて、それを3週に分けて講義する人もいますが、僕は結構スパルタで、毎週課題を書いてもらっています。そのぶん、読む側も覚悟がいるし、添削の時間や手間、エネルギーもかかりますが、文章を上達させるには文章を書く、これしかないんじゃないかと僕は思っています。いきなり自転車に乗れた人はいないと思うんですよ。自転車も、何度も乗っては転んで、転ばないと上手にならないのと一緒に、失敗から学ぶことも多いです。ただ、学校って失敗しないことを教える場所になっていると思うのですが、文章に関しては、いっぱい失敗をして添削をされて、自分はどんなミスをする傾向にあるのかということ、まずは自覚しなさいと教えています。

効果的な文章課題とは？

そこで問題になってくるのが、文章課題の設定です。例えば、僕は以前日本語学校で、日本語教師向けに文章課題についての講義をしたことがあるのですが、そこで次のような質問をしました。

上級者のクラスを担当すると仮定します。クラスの最終目標は、日本語でレポートや論文を書くことです。10回の授業があるとしたら、あなたはどのような課題を学習者に出示しますか？最低2つ挙げてみてください。

日本語教師になろうと思って実際に現場で初級の学生から教えているような先生方は、とても真面目です。真面目というのは悪いことではないのですが…、例

えば、このような回答がありました。最初の方ですが、「日本語が多少上手ではない外国人であっても、大人として自国の社会問題には関心を持っていると思われれます。日本に留学していることで、日本と自国を比較しながら客観的に論述できるのではないかという理由で、①環境破壊・地球温暖化・リサイクル運動、②格差社会・社会に起こるひずみ、③インターネットにおける情報問題、④電力問題・原子力発電の今後を学習者に出してみようと思います。」と。これ、多分僕でも書けないと思います。難しい。課題が固い。真面目だとどうしても固くなっちゃう。でも、学校で教えるとなると、どうしてもそれなりの文章を書いてもらわないといけないという気負いもあって、こういう課題を出してしまいがちですね。そして、この先生が素晴らしいなと思ったのは、「10回の授業の中でレポート作成の基本的な手順、表現の練習、フィードバック、引用してレポートを書く練習、フィードバック、資料を利用して書く練習、フィードバック、などの大まかな流れ…」と書いてあるんです。これ、全然大まかじゃないですね。むしろ細かい。阿部先生と事前に今日の進行のお話をしていたのですが、ここにある紙には7行くらいしか書いてありません。打ち合わせのとき、進行ってこれくらい大まかでいいという話をしていたのですが、やはり教育に携わって、これからのみんなの日本語能力は私にかかっていると思うと、どうしてもみっちりしたカリキュラムを組もうとしちゃうんですね。そうすると課題も固くなっちゃいますし、学生たちの実際の実力に合わせて教育できなくなってしまうところがある。それも1つの問題かなと思ったりしています。

2番目の方は、「クラスに集まっている学習者のニーズ。日本への留学なのか大学院進学か、あるいはビジネス日本語かわからないけれども、以下のようなテーマを設定すると思います。」という意見。想像力が働いていますよね、この方は。「①日本と自国の違いから考えること。②外国人が日本で生活していくために大切なこと。③日本と自国の関係をよりよくするための方策。④メイドインジャパンは、なぜ世界中で愛されるか。⑤日本語を自国で教えるとなったら…。」。この方は、段階的に優しいもの、誰でも言えることから、徐々に難しい問題にしているところがポイントですよね。これ、みなさんが書く側になるとして想像してみたら、文章課題を考えることがどれくらい大切な問題なのかということを知っていた

だけるかと思います。例えば、3番目の方は、なぜその課題を出すのか、その「裏テーマ」を既に設定していますよね。「いろんなところから集めた情報を整理して、報告し、自分の意見を示す課題。自国の観光案内、あるいは用途や条件に合ったパソコンの選定…」とあります。すごいですね。パソコンの選定などは実践的ですけども。あと、「自分の意見を、根拠を示して述べる課題。テーマとして、連絡手段として電話がいいか電子メールがいいか。子どもの教育のためには、都会と田舎どっちがいいか、など…」、ここまでくると、自分とかなり近い問題、今、自分が特別な勉強をしなくても書けそうな問題を設定してきていますよね。もちろん、情報は集めないといけませんが、あくまで自分の問題として書くことができる。こういった課題もありなんじゃないかなと思います。

先生になると、どうしても真面目な課題を出してしまいがちですが、真面目な課題というのは、実は、自分なりの考えをまとめる作業と、伝わる文章として校正する作業の二重の負荷がかかってしまいます。また、学生には、表向き真面目な意見を言っておけば単位をもらえるという考えが長い時間をかけてたたき込まれています。答えを「置き」に行く。例えば、「原発は悪いと言っておけばいいだろう。」と、そういう感じになっちゃう。「1人1人が自覚をもって…」みたいなまとめになる。不思議なことに、文章課題を書かせると、どの国の子も必ず最後にきれいごとで締めるという技術を覚えているのです。昔の思い出を語らせても、「この昔の経験を今に生かして、これから頑張って生きていこうと思います。」みたいな、意味のわからないまとめをしようとする。これは悪い癖なのですが、まずその変なまとめ方をやめろと言っています。こういうことを言っておけば先生は喜ぶ、大人が喜ぶというパターンを、学習者は既に知っているのです。それは、やはり文型教育や構成教育というものの成せる業だと思いますが…、実際、それ別に聞きたくないよなという文章を書いてしまうようになっちゃう。これを社会に出てからもずっとやり続けるので、僕は、学生には、「読む人が欲している情報なの？もう一度考えてみて。」と言っています。

このような真面目な課題を出してしまうと、学生は単位を取るための方法ばかり気にするようになって、実践的な文章力を身につけることからかけ離れていく。これが悪循環を生んでいるのです。そして、クラスはしらけた空気になって

いくでは、このことを解決するにはどうしたらいいのか。先ほど述べました各先生が考えた課題を見ていただいてもわかる通り、まず自分の考えはすぐ出せる。母国語でしゃべっていいならすぐにああだこうだ言えるくらいの課題にしておいて、あとは伝わる文章にするために、その内容をどのように構成するかを考えればよいようにしておくべきだと、僕は思っています。したがって、「真面目な課題」というと少し言葉が悪いのですが、もう少しフランクな、フォーマルではないような課題のほうが、まずは表現したいと思える動機づけを作れるのではないかなと思っています。

授業の〈場〉の雰囲気づくり

伝わる文章として構成する作業に集中し、その技術を身につけるために、①もともと出力しやすい雰囲気を作る、②身近な問題として意見を出しやすい課題を設定する、この2つがやはり必要なかなと、僕は思っております。スライドにはちょっと小さい字で、『『学校人格』から解放するために、レベルや時季によっては着る服を変える。』と書いてありますけれど…、そうなんです。僕、今日はスーツを着ていますが、僕は全15回程度の授業のうち、1回目はスーツを着てオリエンテーションに出ます。それで、文章を書くのがいかに苦しい作業かを説きます。で、覚悟がある人だけ来てねと言って、ぬるい気持ちで来る人をふるいにかけます。2回目以降は、なるべくカジュアルな服を着るようにします。これはクラス活動、教室活動でも同じことですが、まずはクラスの雰囲気作りから始めないといけないわけです。あれは2010年頃に来た学生だったかな…、自分の国ではとても明るいのに、日本に来て暗くなった。そして、その学生は、思ったことも上手く日本語で伝えられないし、失敗するのを恐れて日本語で上手くしゃべれないし…、なおかつ学校というフォーマルな場所で失敗しちやいけないうって思っちゃう。そうすると、出力することの意欲がすぐ低下しちゃうんですね。そのようなときに、スーツを着た先生からここが間違っているとかわれたら、余計に委縮してしまう。僕はそのことに気づいてから、前半の2回から7回くらいまではカジュアルな服を着て、比較的しゃべりたい空気、言いたい空気という

のを作るようにしています。果たしてここまで施す意味があるのかわかりませんが、空気を作るためには、身近な話題から入ると同時に、しゃべり方をカジュアルにしてみるという方法もあります。まあ、どうなんでしょうかね。敏感な学生からは媚びていると思われるかもしれませんが、やはり、失敗してもいいからとにかく話しやすい空気を作っていくことは大事なことはないかなと。これは、留学生に限らず、日本人学生を相手にした場合も同じでした。みなさんも一昔前学生だったと思いますが、学生時代には、「学校人格」というのがあったと思うんですね。「こう言っておけば先生に怒られないぞ。」「こういうことを言っておけば、まあ、いいのかな。」みたいなのがあるのです。クラスでは無口だけれど、友達といるときにはよくしゃべる子もいるわけです。本当は、その人がよくしゃべっていることを、文章化することに上手く紐づけてあげたほうが文章能力は高まると、僕は思っています。

レポートや論文を書くのに必要な技術とは？

レポートや論文を書くのに必要な技術についてです。レポートは、学習内容を理解しているかをチェックするものですよね。論文は、問題の所在と意義を明確にして自説を展開するものです。両方とも技術が必要ですが、これを真面目な課題でやると、どうしても日本語の習熟度チェックだけの課題になってしまい、結局本末転倒になってしまいます。これは文型教育とは真っ向から対立している形になるのですが…、僕は、中級までは文型教育の必要性を支持するのですが、上級でも文型教育はある程度必要かもしれないが、それに囚われすぎる面もあると思っています。例えば、日本語教育だと、「…と言っても言い過ぎではない」みたいな、上級向けの文型をたくさん教えるわけです。そうすると、例えば、僕らが英語を勉強したときに、「Not only ~ but also」みたいなイディオムを覚えて「すごい！これ使いたい！」と思って無理やり二重否定の文を作ることがありますが、外国人でもこれと同じようなことをするのです。外国人も日本語で二重否定したいんです。「過言ではない」と言いたい、使いたいんです。「過言、過言」とずっと言っていて、本当に言い過ぎなのです。留学生って、「過言ではないですよ。」をめっちゃ

くちや使いますよ、不思議なことに。留学生は言いたいんですよね。留学生たちは、そのような熟語を使いたい気持ちになるので、僕は、「いや、それ言い過ぎだよ。」といつも突っ込んでいます。僕は、「過言ではない」はあまり使わないようにといつも言っています。文型教育だと「こういう文型を覚えて、そしてこの文型を使った文章を書いてみなさい。」って教えるのですが、それだとどうしてもこの文型を使ってみたいとか、教わった文型ありきになってしまう。これは良くないんじゃないかと思っています。

文章課題を設定するために必要な条件とは？

文章課題の設定に必要な条件ですが…、まず『今まで取り組んだことのない課題』ですね。中学や高校のときに書いたことのあるような、「自己紹介をしてください」みたいな文章を書くと、散々「こすった」ネタ、「鉄板ネタ」を出してくるわけです。面白くも何ともないですね。「自分は〇〇で生まれて環境問題に興味を持ち、〇〇大学で〇〇専攻で〇〇学をやっています。こういう動機で日本にきています。」みたいなことを書いてくるわけです。「わかった、わかった。」と。けれども、学生が「鉄板ネタ」を持ち出せない課題を教える側が出さないと、学生に頭を使って文章を書いてもらえないのです。

次に、『ネットに答えや意見が載っていない課題』、これはカンニング防止ですよ。なるべく「コピペ」できない課題を考えなきゃいけない。先ほどの話との関連で言えば、真面目な課題というのは、既にいろいろところで議論されているわけです。「死刑を廃止するかしないか」や「環境問題どうするんだ」、「エネルギー問題」とか。「グーグル先生」に聞いたらいろいろ教えてください。僕よりグーグルの方がずっと「知識」がありますから。そうなると、もうちょっと頭をひねらなきゃ出せない課題にしなきゃいけない。楽しめればなお良しと。身近な話ですよ。

そして、『書くために、どうしても習った文型を使わなきゃいけない課題』、これが大事なのです。「文型を覚えてそれを使った文章を書きなさい。」ではなく、「中級までで覚えた文型を使って、この課題だったらこういうことを書きなきゃ

いけないよな。」「こういう情報も入れなきゃいけない。」「あ、あの文型使わなきゃ！」という、逆算で文型を使うことを覚えてもらうということが、まずはとても大事なことじゃないかと思っています。

あとは、『個性を発揮しやすい課題』とか、『二元論ではない意見を出しやすい課題』です。賛成・反対を問う課題は、二元論で考えることからすぐにどうとでもなってしまうので、なるべくそうではない課題を出しています。

そして、タスクをあまり多く設定しないことです。1つの課題で1つの文型、あるいは1つのテーマ、この文型ができているかどうかを確認するためにこのテーマの課題を…、というのをやってもらうようにしています。ここでは、文章課題の題目の設定についてお話していますが、このことはとても大事で、文章指導の中で半分以上のウエイトを占めると言ってもいいんじゃないかと思っています。

課題における「裏テーマ」の設定と課題の例

課題ごとにどのような「裏テーマ」をまず設定するのか。これは、みなさん自分の授業で1年なり半年なり、全何回の授業で、最終的にどこにたどり着きたいのか。たどり着きたいところに必要な技術というのを何回かに小分けにして、それをどういうテーマで練習していくのかを考えてもらいたいのです。僕の場合は、「実践的な文章を書けるような人間を育ててほしい」「レポートまでは書けるようになってほしい」と言われたので、このテーマに基づいてちょっと整理してみました。①相手の印象に残す。②プレゼンテーションができる。魅力的に具体的にわかりやすく伝える。③企画を通して物事の本質に迫る。④言うことにリアリティを持たせる。⑤因果関係が明確な文章を書く。⑥反論を想定した文章を書く。⑦自説を揺るぎないものとする。⑧わかりやすく伝える。⑨状況証拠を積み重ねる。つまり、決定的な証拠が無いものを、状況証拠を積み重ねて証明していく。これは論文もそうだと思うのですが、ほとんどの学問というのは、問いに学ぶ、つまりわからないものをどうやってわかっていくかの作業なので、状況証拠を積み重ねるわけです。⑩ある理念を持って物事を整理する。⑪筋の通った意見を述べる。

⑫引用をする。⑬参考文献を示す。こういった「裏テーマ」があります。他にはスタイルですね、文章の書式。こういった「裏テーマ」を設定して、これを1つずつクリアできるような文章課題を考えることになります。したがって、ここが教える人の個性の持ち方かなと思います。そして、それを各レベルに合わせて中級後半、上級前半、上級後半に合わせて、同じテーマだけど課題をちょっと変えていくようなことを、僕はやっています。

「裏テーマ」とはどういうことかというところ…、例えば、数学にもありますね。「ある水族館の入館料は、大人2人と中学生3人で3,100円です。大人1人と中学生4人では2,800円です。大人1人と中学生1人の入館料をそれぞれ求めなさい。」この数学の問題の「裏テーマ」は連立方程式を使いなさいということで、このことは問題を見ればわかるようになっていますよね。この問題は、連立方程式を使いなさいという「裏テーマ」に気づけるか気づけないかをチェックする問題ですよ。実は文章も同じで、課題を見たときに、「あ、これってこの技術を使うんだな」「あの文型使うんだな」「この情報とこの情報を入れるんだな」ということを書く前に整理する。そして書くことを習慣づけていく。この作業なんですよね。

しかし、学生たちは、聞かれていることが何なのか、書くべき情報が何なのかを、あまりにも考えないで文章を書き始めている。教える側は、学生の課題を読んで、「うん、上手く書きました。」で終わっていると思いますが、学生に課した問題には、1つ1つきちんとテーマがあることを教えた方がいいと思います。これは上級クラスのある Semester で導入した課題です。『知らない日本人に1万円を借りる』文章を書く課題を出しました。僕の授業で1回目に書いてもらうこの文章で、「なぜ知らない日本人に1万円を借りる文章を書かせたと思いますか？」と学生に聞くのです。「みなさんは、知らない人にお金を借りるとき、何を言いますか？これをきちんと想像してください。」ということなのですね。そうすると、「私は〇〇の誰々です。」ということを必ず言わなきゃならなくなる。つまり、自己紹介も兼ねるわけです。なおかつ相手を信用させるために、例えば、「今お借りしたものは必ず返しますので、これが私の連絡先です。」とか、あるいは「こういうアルバイトをしていますので、いつでもそこに来てください。どうしても、今借りなきゃいけないんです。」というようなエクスキューズも必ずつけなきゃ

いけない。見ず知らずの人に、いきなり「あのお、すみません。1万円貸してもらえませんか？」では、貸してもらえないわけがない。じゃ、どうやって相手に「しようがないな」と思わせるのか。そういったことをきちんと頭を絞って考えると、「ああ、これはきちんと自己紹介もしなきゃいけないし、相手に好印象に思われなきゃいけないし、相手を信用させなきゃいけないんだ。この3つをクリアしなきゃいけないんだ。」ということに気づくわけですよ。実際に借りられるかどうかわかりませんよ。ただし、学生には、この課題で出された真意を汲み取ってくださいと。学校で出された課題には真意があるけれども、世の中のほとんどのものには真意なんて無いじゃないかという人がある。でも、そんなことはありません。自分が書く文章には、なぜその文章を書くのかという真意が必ずあります。例えば、同じ内容でも、紀要に書くものと一般の雑誌に書くもので書き方が変わるの、読む人がいて、読む人が求める情報も変わってくるからですね。正確性を重んじているのか、要するに何なのかを知りたいのか…、それで書き方が全然変わりますよね。それと同じことです。まずは、日常的に課題には真意があるのだということ覚えてもらいます。

『私の趣味とその魅力』。これはプレゼンテーションが上手くできるかどうか。魅力的に、かつ具体的に、わかりやすく伝えるということを書かせています。例えば、うたを歌うとか、映画を観る、文章を読む、そういうことを所詮普通の趣味だと思いこんで、なかなか上手くプレゼンテーションできない人がいるのです。ただ、趣味というのは、メジャーかマイナーかが問題ではありません。例えば、カラオケに行くことを趣味にしている人がいることは、みんなが知っている。しかし、カラオケに行かない人は、カラオケに行く人を知っていながら、自分には行かないのです。「何が気持ちいいの?」「いや、歌をうたうと気持ちいいじゃん。」「え、どこが?」と、常に思っている。つまり、自分と同じ価値を共有していない人にどこまでアピールするのかを、よく考えなきゃいけない。みなさんも趣味はあると思いますが、家族の理解を得られていないパターンがほとんどだと思います。実は私もそうなのですが…。それでも、人にその魅力を伝えて理解を求めていくのは大事なことです。ですから、この課題は、プレゼンテーションの課題なわけです。

『自分の国と日本を比較して気づいたこと』。単に比較をさせるのではなくて、比較を通して物事の本質に迫るわけです。例えば、韓国人の留学生がこんなことを言っていたのですが、「ご飯の食べ方が違う。日本人は器を持ってご飯を食べるけれども、韓国人はご飯は茶碗を置いて自分でお箸で食べる。以上。」と。しかし、僕は、「違うでしょ。それは、あなたが今まで学校でやっていた単なる比較です。比較を通して気づいたことだったら、比較を通して何がわかったかというところまでできないと、きちんとした比較になりませんよ。」という話をしています。それで、調べてもらったら、「日本は基本的に武士道がご飯の食べ方に影響していて、いつ敵から攻められてきてもすぐに対応できるように器を持ちながら前を向いて食べるけれども、韓国は、茶碗の底に福が宿るという信仰があって、茶碗を上げると福が逃げるから置いたままにしてあるし、お箸も鉄製になっていてなかなか上にあがらないようになっている。」ということがわかる。そこまでくると、文化論になるじゃないですか。これって本質ですよ。学生には、このようなことをやってもらっています。まず、課題をよく読みましょう。あと、交通に関して比較をする人もいまして、「私の国ではバスが主な交通手段です。日本は電車です。以上。」と、このようなことを書いてくる学生がいるのですが、「それ比較になっていないよ。」という話をします。バス事情について、「自分の国と日本をまず比較して、さらに電車事情について自分の国と日本を比較しないと、正確な比較になっていないよ。」と。「メディアがよくやっている都合がいいところだけの比較になっているよ。」ということを指摘しています。このような課題をやると、やはり自分に都合のいいような比較をしているなということにも敏感になるので、読み手としても優秀になっていきます。

『私の好きな人、好きだった人』。第2回目の『私の趣味とその魅力』という課題が上手く書けない人に、恋愛でなくてもいいので、昔お世話になった寮母さんでもおじいちゃんやおばあちゃんでもいいので、好きだった人を魅力的に語って、この文章を読んだだけで「この人に会いたい！」と思わせる文章を書いてみなと言って書かせます。この課題は、みんな趣味と魅力よりも饒舌に語るのですが、どうしても感情が先走って、人に上手く伝えられない。例えば、自分が紹介したい人が男なのか女なのかもよくわからない。あるいは、どれくらいの背丈で、ど

のような外見で、ということも全然書かない。だから、いつも「読む人のことを考えなさい。」と言っています。「読む人は、その人がどのような人なのかをまず想像したいから、外見的な情報だつて必要な情報なんだよ。あなたの中には絵があるかもしれないけれども、読む人の中には絵が無いんだよ。」ということの説明してもらいます。

『嘘をつきなさい』。論文を書くときには、本当のことを本当らしく書ける技術というのはとても大事だと思うんですね。例えば、多くの人を説得するには、数字を出すとか、図表、データを出すことは大事なことです。「その昔」というよりは、「紀元前 243 年」という方が本当っぽいじゃないですか。具体化することが必要だということを学んでもらっています。「リアル」ではなくて、「リアリティ」が出る技術とはどのような技術なのか。「嘘が上手くなければ、本当のことだつて本当らしく伝えられないんだよ。」ということを行っています。これは、自分に関する嘘だけはダメにしています。「私の一族は、昔王族でした」といったような裏の取れないものはやめてもらって、もう少し都市伝説に近いような、隣のクラスの人がその文章を読んだら「本当に？」って言えるような文章を書いてくださいと話しています。

『たばこ容認派としての主張』。「先生は、なぜたばこを認める側からの主張をさせるのか」、そこから考えなさいと学生には言いました。世の中のほとんどの人は、たばこは悪いものだと知っていて、散々言われているわけです。それなのに、「なぜたばこ容認派なのか？」と。そう考えると、まず、書く前にたばこは良くないという大前提を知っている状態から入れるんですよ。つまり、どんな反論が返ってくるかわかった状態から文章が書けるということなんです。この文章の課題は、たばこを「容認」つまり「推進ではない」ぞと。翼賛ではないぞ、たばこを容認しなさいと言っているわけだから。「迷惑かけなきやいいんじゃない。確かに身体には悪いけど、本人が吸いたいと言っているのだから別にいいじゃん。」みたいな。この課題を出す、「A しかし B」という文型は必ず使わなければいけないことに気づく。これは、反論を想定した文章をいう裏テーマをもった課題として出しています。

『比喩』、わかりやすく伝える。これは話を置き換えるという作業です。専門家

になればなるほど、専門家じゃない人にわかるように、自分が知っていることを相手が知っているものに置き換える作業が必要になってきます。「子どもに恋がわかるように比喩を使って説明しなさい。」というような課題を出します。この課題では、例えば、こんなことを書いた留学生がいましたよ。「人間の人生を和食と仮定すれば、恋は和食にとって大事な醤油だと言えるに違いない。」と。「恋は醤油だ」と。「高級な寿司のような人生を送っている人も、中流のどんぶりのような人も、そして、カップラーメンのような人生を送っている人にも、醤油のような恋が無かったら、人生はどんなに幸福でもイマイチという感じがする。つまり、醤油という恋は、和食という人生を美味しくする。」と。誰が美味しいことを言えっていうんだ! 「ところが、完全に良いというものはこの世界には存在しない。もしも醤油を入れ過ぎたら、その食べ物は塩辛すぎて食べられなくなる。同じように、人生に恋を入れすぎたら、その人の人生も塩辛くなるだろう。」と、笑うしかないですよ。20代が何言ってるんだよ、みたいな話ですけども。「恋は、世界中の人々に非常に貴重なものと認められている。貴重という言葉は、必ず必要という意味ではない。だから、恋が無くても生きられる。醤油が無くても寿司が食べられる。でも、それではその寿司はどんな味がするのでしょうか。味が無いという人もいれば、自然の味がして幸せだという人もいるだろう。このように、恋は人によって味わい方が違っていくということがわかる。」と。でも、比喩というのは、自分が知っているものを相手が知っているものに置き換えることですよ。子どもは恋をしたことがなくても、醤油は食べたことがある。だから、醤油で例えるわけです。共通点がたくさんあればあるほどいい比喩なんだということを教えていくと、こういう文章を書けるようになるということですね。

『親の子どもであることを証明しなさい』、しかも、DNA鑑定とか、戸籍証明とかを使わずに、今証明して、と。お母さんのお腹から出てきたことを覚えている人はまずいません。そうすると、親の子どもであることをどうやって証明するのか。実は、これはとても難しいです。おじさんが僕が生まれたときの話をしているの、多分おじさんと僕は関係者なのだろう。つまり、誰かの意見を引用することが必要になってくる。あるいは、見聞きしたこと、「…だそうだ」とか、伝聞の文型を必ず使わなくてはならない。「親は目が2つあります。僕も目が2

つあります。なので、僕は親の子だと思います。」と。これは証明にならないですよ。多くの共通点を持っているものを挙げても、反論が滅り立ちますね。「反論を想定した文章でやったはずでしょ。もう少し珍しい特徴を引き継いでいた方が、親の子であることを証明できるよ。」なんていう話をします。あるいは、「兄弟というサンプルがいる人は、これは使わない手はないよ。」という話をしています。中国人なんかは、手相のことを書いてきたりするのでびっくりします。このように、ぼんやりして何となくわかっているけれども、決定的な証拠がないものは、状況証拠の積み重ねの技術を覚えて、さらにそこに「嘘」という課題で覚えたりアリティの技術を使えば、より本当らしくなっていく。レポートとか論文で使うような技術も自然とつくようになっていくのです。会社内でも、何か新商品のプレゼンテーションをするとき、上司を説得するときには、何か数字を出すとか、似たような商品でこれくらい売り上げを出しているよとか、これからの予測して誰にでもわからないことだけでも、状況証拠を集めながら売れることを証明していくという作業が必要になってきます。それと同じ技術です。

『5人の登場人物が出てくる物語を、この人物たちを、気に入った順から整理して書いてください。そして、その理由を述べてください。』というのもやっています。これは二元論でも感情論でもない。1つの哲学を持って、人の命を助けた順とかね。理念を持って物事を整理して、自分の気持ちを切り離れた意見を出しましょうと。「理念の無い意見は、意見ではなくて感想です。」という話をしています。これが実社会でも意外に共有できていないような現場が多いので、意見というのは、できれば理念を持って自分の気持ちと切り離して述べてみましょうと。さすがにここまでくると、今まで自由に出力していたものが何となく校正しなくちゃいけないな、あるいは理念を述べなきゃいけないなということになってくるわけです。

総合課題として、1つ目は『最強の動物』という課題をやっています。これはフェルミ推定みたいなもので、『地球上にいる動物を全て1メートルの体長に統一した場合、一番強い動物は何か?』を考えてもらいます。これは、嘘をつくと、という課題で学習した数字を示すことであるとか、1メートル換算時のスピード、体重、あるいは攻撃力を示したり、示した内容に対する反論を想定する。例えば、

「いや、絶対三次元的に動く鳥の方が強いと思う。」のような反論にどう答えていくのかを、この課題でやってもらいます。

その他の課題例について

中級前半のクラスでは、今述べてきたすべての課題がもう少し易しくなります。飲み会のお知らせは技術を覚えるためにみんなにやってもらいますが、問い合わせのメール、例えば『アルバイトの募集広告が出ていました。さあ、あなたはどのような情報を問い合わせますか?』という設定のメールの書き方から教えます。次に、『あなたは喫茶店を経営することになったらどういうメニューを作りますか?』、メニューを書いてもらっています。そして、『デートと言わずにデートのお誘いをしてみてください』というメールを書く練習。これは、相手の心情を察して、「これは書く人が1人、読む人1人の文章だよ。」ということ、散々言ってやってもらっています。この課題は、西洋の人は比較的得意ですね。道案内の課題、これは先ほど申しましたけれども、『子どもが大学まで来られるような道案内』ですね。因果関係が明確な文章、最近感じた不便なことや、あとは誰が読んでも同じ結果が得られる文章を順序立てて書く練習、これは『得意料理の作り方』という課題を出して書いてもらっています。この課題は、例えば理系・文系どちらでもですが、自然科学の論文だと同じ手続きを踏めば必ず同じ結果になる文章の書き方の練習でやっています。あるいは、『結婚したい人の条件を3つ挙げなさい』という課題では、自分の意見を整理して順序立てて論理的に書くことを目的にしています。このような課題を中級前半のクラスでは出しています。他には、『自分の国に面白い法律を作りなさい』という課題も出しています。セメスターの後半でこのような課題を出すと、それまでの文章で学んだ技術を使って書けるようになっていく。例えば、このセメスターでは、『自分の国の自治体の職員になったとして、ゆるキャラを作って地元誘致をきなさい』という課題を出しました。これは、結構実践的な文章だったのですが、まず「ゆるキャラ」という日本の文化を学ぶところから始めて、何となくイラストを描いてもらって、「ゆるキャラ」というのが、実は地方自治体を象徴するような何か、つまり商品で言

うキャッチコピーに近いものになるということを入れてもらいます。それから、何を観光資源にしてどのように人を誘導するのか、人の動きまで含めたプレゼンテーションをしてもらうような文章課題を出しています。それを図表にして、説得力のあるような文章課題をやってもらったりしています。ただ、この課題は、セメスター後半の11、12回目あたりの課題なので、日本人がいきなりやってもかなり難しい、いわば「ハーフマラソン」級の課題ですが…、ここまで1週間ごとに必ず「ジョギング」を積み重ねてくると、ちょっと嘔みごたえのある課題かなというノリでやってもらえることが多いので、学習意欲の高いクラスではこのレベルの課題までやっていいかと思います。ただ、例えば、「嘘をつきなさい」とか「比喩を使いなさい」などの割とカジュアルな課題では、真面目なことを考えなくてもいいので、どういう技術を使って伝えればいいのかということだけに特化した文章課題を出していくと、日本人に文章表現を教えるときにもフィードバックできる技術なのかなと思っています。

以上です。

【阿部】 ありがとうございます。

とても興味深いトピックがたくさんありまして、私も何か使えるトピックはないかなと、細かくメモを取りつつ、いろいろ考えながら聴いておりました。

この辺で少し休憩を取りまして、休憩後、討論、議論の時間としたいと思います。まず私と安部達雄先生で討論をしながら、その後、お集まりのみなさまからご意見、ご質問を伺いながら、会場全体で討論したいと思います。

では、休憩とさせていただきます。

討論・質疑応答

【阿部】 お待たせしました。

少し長く休憩を取らせていただきましたが、再開したいと思います。

後半は討論の時間ということで、先ほど安部先生にお話いただいたことを踏まえながら、まず私から質問や意見等、話題提供をしながら、今日お集りのみなさ

んに発言していただく、あるいは安部先生に直接伺いたいことがあれば、ご発言いたくことにしたいと思います。

実は、安部先生はこのワークショップの後、「サンキュータツオ」さんとしてのお仕事がある関係で、時間的な制約もあります。したがって、もしご意見や内に秘めたものがあれば、この時間帯の中でお話しいただければと思います。

【安部】 こんな寒い日に、安定して20人も来るというイベントなんですね。本当にありがたいことで、貴重なお時間、すみませんがよろしく願いいたします。

【阿部】 そういう事情もありますということだけ、お集りの先生方に先に申し上げておきます。まず、私から「質問」というと何なのですが…、

【安部】 お叱り？

【阿部】 いや、お叱りではありませんのでご安心ください。以前のワークショップのときにも同じように感じたことがいくつかあったので、まず、そのことを述べたいと思います。

課題の設定に関する話の中で思ったことで、先ほど話されていた日本の作文教育のダメなところに関する話です。初年次教育で文章を書く授業で、担当の先生方には、自分の専門のテーマばかりを題材にははいけませんよというお願いをしているにもかかわらず、自身の専門、つまり自分の得意な分野をテーマにした課題を出したがるのか、あるいは先ほど安部先生がおっしゃったように、まさに「学校人格」が自然に出てくるような、あるいは出てきやすいような課題を出したがるのですよね。学生に対してあえて気を利かしているのか、大学の教員にも「学校人格」があるのか、そのような課題を設定したがるのですよね。

このようなことになるのは、指導する教員に苦勞があるからだと思うのです。1つは、学生が書いてきたレポートを指導する際に、教員が背景知識を持っているか否かという問題です。学生のレポートのテーマに関する背景知識がないと、担当教員は学生のレポートを読んでも理解が難しいかもしれないと思うのです。

学生のレポートには、担当教員の知らないことが書いてある、つまり裏をとれないことが書いてある可能性があるのですね。たとえ学生のレポートの背景知識を知らなくても、文章表現そのものというか、センテンスやパラグラフの書き方をきちんと指導する、文型に特化してチェックするだけでいいのですが…、例えば、教員の専門に関するテーマを学生のレポートとして課すと、教員は指導しやすいでしょうが、学生が、課したレポートのテーマについての知識があまりにも無すぎで、何を書いているのかわからないものになってしまう。本当は文章を書く能力があるのに、課されたテーマが難しすぎてうまく書けない、まとめられないことがあるというのに、私は同感というか…。

【安部】 そうなんですよ。だから、あるところまでくると、ハードルがぐっと上がっちゃうんですよ。うかつなことは言えないなって思わせてしまうんですよ。

【阿部】 今の大学教育の問題との関係で言えば、作文教育の話を絡めると、まあ、このことには私情が入るのですが…、実は、小中高生、大学生は、学校教育の中で「学校人格」を持っていて、いや身につけさせられていて、生徒・学生達は、「学校人格」の中でどうやったら点数が取れるかというリテラシーを無意識のうちに身につけている。このことは、実はとても問題なのではないかと思うのです。授業の単位を取得するためにはある意味合理的なのかもしれませんが、合理的行動という意味で「学校人格」に合致する、すなわち、教員がある程度想定しているだろう理想的で無難な内容に文章をまとめる方法を、学生が身につけて実践していると思うのです。あるいは、教員の主張や思想に合致するような内容の文章を書くこともそうですね。この点について、私は、日本の学校における文章教育の中に、非常に大きな問題があると思っています。

【安部】 僕自身が受けた国語教育ということで考えると…、僕は、国語が全然できなかつたんですよ。算数、数学しかできなくて、なんでこんなに国語ができないんだろうっていうくらい国語が苦手でした。僕は中高一貫校だったのですが、

その学校で、まず『天声人語』の書き写しをやらされまして、その結果、文章を書くときには、やはりこれくらい小難しいことを書けなければならないという思い込みが大きくなったんです。それと、特殊な学校だったので、論語の完全書き写しみたいな授業があったんです。週に1回「論語」という授業があって、授業の最初に白文帳といって、半紙を折って和綴じをする作業から始めるのです。で、論語を筆で書き写すのです。「え？今、何時代？」という、そのような授業があったのですが…、それをやったことで、論語は未だに覚えているんですけどね。ただ、それは「記憶」という作業であって、文章表現の授業ではなかったし、道徳の教育も含めていたんだろうなと思うのですが…。当時は、SNSはもちろん、インターネットも無いですし、何かを発信するということが身近でなかったのも、そのような授業を受けるうちに、表現というものに対するハードルがものすごく高くなったんですよ。

文章を書くのが苦手で、国語の問題も解けないとなると、他のみんなはセンスで解いているのかなという妄想をしながらも、僕は、現代文は最終的には答えさせたい答えを見抜く作業なのだとすることに気づいて、ゲームとして現代文を解くことに目覚めていくのですが、逆に言うと、ほとんどの人がこのことに気づけないまま、国語に対してすごく嫌なコンプレックスを持って育ってきたことがとても多いのかなと思っています。

そうすると、規範となるものを書き写すのは、果たしていい作業なのかどうか。もともと出力したいことや表現したいことがあって、それに型を当て込んでいくことが一番自然なんじゃないかと思うので、できれば教える順番を逆にしたいなというか…。文法に関してもそうですが、やはり形式から覚えさせるように教えるのがやりやすいんです。例えば、機能文法を教えた方が教えやすいし、構文を教えた方が教えやすいですよ。このようなやり方は、教える内容が同一のクオリティで、全ての人に提供できるサービスにもなるので、教えやすくなると思うんですけど、もうちょっと、「言いたい」「しゃべりたい」「こういうことを伝えたい」というところをまず掘ってあげないと…、やはり形式主義も功罪があるので、まず表現する動機とか、そのようなところから立ち上げていく必要があるなと僕は思いました。

【阿部】 そうですね。極端ですよ、小中高の国語教育は。例えば、現代文を解く方法は、文章の構成をどのように見ぬくかというように、実はとても形式的なことですね。私も、中学まではたまたま波長が合ったのか、何も勉強しなくてもその場で「適当に」答えたものが正解になっていて、自然とある程度の点数をとれていたのですが、高校に入って、中学と同じようにフィーリングで解答してもことごとく不正解ばかりで、波長が全然合わなくなった経験があります。しかし、現代文の読み方、問題の解き方とは、日本語を読み解くというか、文章の構造や形式を読み解くことなのだということがわかって、発想を転換することで、正解にたどり着けるようになった経験があります。このことは、塾や予備校、受験参考書を通して学んだことで、学校では教えてくれないんですよね。学校の現代文の授業が、教科書などで取り上げられている著者の知識や思想、主張を学ぶことになっている。もちろん、その知識や思想、主張は、「学校人格」の形成にとっても都合がよく、まさに理想的な「学校人格」の内容となっているわけです。

逆に、小学校や中学校の作文の授業では、先生が「好きなことを書けばいいのよ。」「自由に書いていいのよ。」と言うのですが、そう言われても子どもは何を書いていいかわからないわけです。作文の材料のを見つけ方や文章をまとめていくコツなど、作文の書き方についてファシリテートすることなく、「好きなことを書きなさい。」と放り投げるわけです。

例えば、私の中学の国語の先生もそういうところがあって、とにかく「自分の意見を言いなさい。」「自分の意見を持つことが大事です。」という理想を言うのだけど、意見の述べ方や意思の表示方法に、「学校人格」を背景にしたある種の理想が見え隠れするのですよね。

例えば、ある日、国語の授業でディベートみたいなことをやってみようということで、細かいことは忘れましたが、賛成・反対というか、歴史上の人物の生き方をめぐって、確か『解体新書』の話で、「杉田玄白、前野良沢どちらの生き方考え方が正しいか？」というテーマで、両者に分かれて意見を言い合うことをやったのです。そのときに、「杉田玄白派」が「杉田玄白が正しい」と言うと、それ以上続かないわけです。理由の付け方がわからないわけです。もちろん「前野良沢派」も反論できない。そうすると沈黙の時間が続いて、先生は「なんで黙って

いるの?なんで意見を言えないの?」と怒りのボルテージが上がるわけです。そして、この分け方自体、実は「誠実な」前野良沢を支持することが先生には望まれているのかなと、空気を読んで「前野良沢派」に立って感情論をまくしたてる生徒が出てきたりするわけです。しかも、最初、「杉田玄白派」「前野良沢派」に分かれるときに、どちらかに決められない生徒が多くて、仕方なく「どちらでも派」を作って、意見を聞いてどちらかに行くようにしていたと記憶していますが、その先生は、「どちらでも派」にたくさんの生徒が流れたことに、そして、その後どちらかに決められない生徒が多かったことに結構怒っていたようでした。それこそ、「自分の意見を持つことが大事」で、「どちらともいえない」という態度は人間としてダメだと思っていたのじゃないでしょうか。でも、オルタナティブな議論には必ず一長一短があるわけで、基本的にどちらに決められるわけではないのですよね。この場合、本当はくじ引きなどをして、自分の本来の主張とは別の立場を割り当ててディベートをするべきだったんですよね。その上で、ある立場になったらどのように正当化するか、どうやったら反論できるかといった思考するコツをファシリテートするべきだったんですよね。その先生は、授業の工夫などでは定評があって、表彰されたりするほどのいい先生だったのですが、そのときは「ディベートゲーム」のやり方を知らなかったのか、生徒が立場をはっきり決められないことに怒っている態度には疑問を持ったという経験があります。

また、その国語の先生だけではないのですが、私が小中学校で受けた作文教育には疑問があって…、先ほどの話に戻すと、私が受けた作文教育の経験を踏まえて、よく授業で学生に、「君たちが習ってきた作文の書き方、やり方は間違っている。」と話しています。私の経験上、学校でいい作文だと言われるものには、だいたい2つのパターンがあると。1つは、「部活動でがんばって優勝した!」「結果は出なかったけどがんばった!」という「成功物語」や「武勇伝」。もう1つは、「おじいちゃんの死」とか「お父さんの死」のような「身内の不幸」。これは小学生ぐらいだと優秀な作文になる傾向があると思っています。多分、小学生が身内の不幸に直面するという事実は、読む側を思考停止させるほどのインパクトを持っているからだと思うのですが…。じゃ、「いい作文、先生に評価される作文を書くためには、身内を殺さなきゃいけないんですか。」と、本末転倒なこと

を言って怒られたことがありました。まあ、加害者の「手記」じゃないですが、もし身内を殺したら読む人の興味をそそる作文が書けると思うのですが…、それは冗談として、生徒がアウトプットしたい課題を設定する場合にも、生徒にどのように興味を向けるかが問題になるのですが、小中高で生徒に文章を書かせるとき、題目やテーマの設定方法、教師による誘導みたいなものの中に、「学校人格」の要素がいろいろはびこっていて、大学生になっても、その「学校人格」に無意識のうちに囚われていて…、

【安部】 これは根深い問題です。「学校人格」は、もう小学生の頃から蓄積されているものなので、学校ではこう振る舞うべきだとか、学校で言って良いことと悪いことというのを「学校人格」が知っちゃっている中での表現選択ということになるんですけど。本来なら、友だちとしゃべっている美味しい食べ物の話であるとか、趣味の話、あるいは恋の相談、そういったものを上手く出力できるようになるのがベストなわけですよ。そして、それと同じ感覚で意見を述べる、考えることが大事だと思うんです。教える側の立場から考えてみると、先ほどの話は、賛成・反対という二元論で思考停止していると思うんですが、じゃ、なぜ、そもそも二元論の課題を与えるのかということに踏み込むと、それは、例えば、ディベート技術を学ぶときに、反論を想定するとか、あるいは結論を先に言う、理由をいくつか説明するなど、具体化する技術があるからだと思うんです。ただ、いきなりそれをやるよりは、全員から反論が見えている課題をやった方がいいんじゃないかというところから、例えば、「たばこを容認してみなさい」とか、「戦争を容認しなさい」、だとかちょっと社会的になりすぎるかな…、そういうくだけた課題にした方がいいんじゃないかなと思いますね。

【阿部】 それはとても面白い試みだと思います。例えば、二元論で「あなたはどっち？」と選択させて…、

【安部】 まず、迷うじゃないですか、そこで。

【阿部】 迷わせないで、例えば、たばこを容認するという前提で全員に文章を書かせるというのは、とても面白いなと思いました。

【安部】 この課題は2回の授業に分割することも可能で、翌週反対の立場から言わせればいいのです。いきなり最初に「たばこ反対」の主張をしてしまうと、やはり社会的常識というものを背景に、反論を想定しないで、とにかく「いや、いけないものなんです」、「身体に悪いんです」と言ってしまうので、「そうじゃない、世の中はマジョリティとマイノリティという見方だけではなくて、賛成する人と反対する人がいるので、反対する人にどう語りかけるかという技術を磨くために、両方の立場から考えた方がいいよ。」ということも可能なわけですね。だから、分が悪い立場に立つてもらうことをあえて最初にやると、本来、賛成・反対という二元論で目指していたはずのタスクは達成できるのではないかという考え方で

【阿部】 その方法は私も「使える」と思いました。あるテーマについて、賛成・反対に分けて、反論も書かなきゃいけないよと言っても、学生は反論を書かないんですね。今、思い出したのですが、例えば、脚本でいう「箱書き」みたいなことをさせて、反論を書く「箱」＝欄を作って、その「箱」を必ず埋めるようにさせたんです。そうすると、反論は一応書くのですが、それでも自分の意見に対する反論の場合、その内容はやはり弱いというか、うわべだけの反論になります。つまり、自分が結論として言いたいことに対する反論に関しては、思考を十分に展開できていないのですよね。しかし、本当は、その部分をじっくり考えさせることが大事で、自分の結論に対してどのような反論が想定されるか、自分自身でシミュレートすることが大事なのかなと、お話を聴いて思いました。

【安部】 そうですね。あとは、どの課題でも、話を具体化してもらおうということを行っているんですけども。何と言うんですかね…、頭が良くなっていけばいくほど、話が抽象的になっていくんですよね。書く側は概念だけで伝わらと思うんですけど、そうではないと。例えば、嘘をつくときだって、嘘をよりり

アルにしていくためには、「例えば」という接続詞は使わざるを得ないよねという話をしていくと、やはり具体的に伝えないと相手には伝わらないし、数字を示さないと相手を説得できないとか。そういうことに気づいてもらえるんじゃないかなと思いますね。

【阿部】 私も先ほどお話を聴いていて、私が言いたかったことではないですが、とにかく、作文のテーマが、部活動で優勝したとか、優勝しない子でもとにかく頑張ったんですということを言えば、国語の先生は、何か心に響くらしいんですよ。

【安部】 そこで、どう頑張ったかを具体化する技術が絶対必要なわけです。頑張っただけで、もやもやと良い話を聞いただけになっちゃうから。

【阿部】 まあ、今思えば、国語の先生に響いた作文には、おそらく具体的なことも書かれていたのかなと思いますが…、それでも、実際に良いと評価された作文の何が良いのかが、中学生当時の私には全くといっていいほど理解できなかったもので、先生は、いわゆる「学校人格」に沿ったネタで書いた作文ばかり評価しているという、ある種の偏見を持って見ていたのですけれども…。

ただ、今なぜこの話をしたかと言うと…、安部達雄先生は、芸人「サンキュータツオ」で仕事をされる時、マネジメントはオフィス北野ですよ。それにかこつけるわけではないのですが、実は、私、たまたま北野武さんの『新しい道徳』（幻冬舎）という本を読みまして、この本の中に先ほどから話題になっている「学校人格」と関係するかなということが書いてあったんですね。北野さん曰く、「巧言令色鮮なし仁」というように、不道德な人間ほど、道徳の知識を役立てて、まさに巧言令色、つまり上っ面だけの道徳を振りかざして悪さをすると。こうすれば人から褒められるということを学校の道徳で教われれば、不道德な人間はその「テクニック」を学んで、道徳的な人間を演じて人をだますことに役立てると。北野さんの本には、オレオレ詐欺がそのいい例だと書いてありましたが。道徳を「学校人格」に置き換えると、先生に評価される「学校人格」を身につける、学校で

身につけさせることで、生徒は、どうやったらうわべだけの点数をとれるかを無意識のうちに覚えるようになって、「学校人格」を演じて先生を欺いているかもしれない。しかも、先生は生徒に欺かれていると思っていない。教える側は、「学校人格」を表出している生徒を高評価しているかもしれないが、生徒は、「学校人格」を演じているのにすぎないわけで、その評価は怪しいものだと思うわけです。その意味でも、「学校人格」をうまく演じている奴ほど悪い奴だと言えるのではないかと。

それで、先ほどの話を伺っていて、表現教育もそうだし、専門の論文を書くプロセスもそうだし、全部そこは通じるなという気がして、私は今日のお話の中ではそこが一番ポイントなのかなと思い、こういうお話をさせていただきました。

【安部】 そうですね。ですから、セメスターの前半、6・7回は、「学校人格」からいかに解き放つかを中心に、ただひたすら「揉んで」いく。芸人用語を使っちゃいましたけれど、「揉む」というのは、あたためていくというような意味ですが…、そのような「揉んで」いく課題を出していますね。何かいい例を挙げられればいいんですけど…。いずれにせよ、面白いものを書いていいんだという空気感を作っていくことが、結構大事なんじゃないかなと思っています。

【阿部】 私から最後に一点だけお聞きしたいんですが、「学校人格」というのは、日本だけではなくて全世界共通なのでしょうか。それは、本当なんですかね。

【安部】 本当にそうですよ。特にアジアはそうなんですけれど…、でも、ヨーロッパの学生も、アメリカの学生も、やはり「学校人格」を使い分ける傾向があります。

そういえば…何だったかな、これは女子学生が書いてきたのですが、自分の国と日本を比較して気づいたことで、「日本の女の子の下着がおかしい」ということを書いてきたんですよ。

【阿部】 どうおかしいんですか？

【安部】 日本の女性下着は、なんであんなにいっぱいワイヤーが入っていてごちゃごちゃしているんだと。で、文章を書いてきたのはアメリカ人だったかな。アメリカの下着は、あくまでバストの部分を守るだけのものだけど、日本人の下着は補正が入っていると。身体を矯正するつもりかと。あんなのを着けたら、ワイヤーがバストに刺さって血が出るに違いない、みたいなことが書かれてあるんです。で、下着の色もおかしくて、あれは夜脱がされる用だとか書かれているんです。日本の女子がこんな下着を好きなのは、多分日本人の男がロリコンだからに違いない、みたいな。

でも、おそらく「学校人格」だったら、まず下着のテーマを選ばないですよ。

【阿部】 そうですね、確かに。

【安部】 セクハラにもなっちゃいますしね。そこは非常に難しいところですが…、そういうことを表現してもいい場所なんだということですよ。だから、LINEとまではいかないけれど、ベッキーさんほどの人格じゃないですけども…、もうちょっとね、仲間と一緒に勉強している感はあった方が…、文章表現においてはですよ。座学ではないので。

座学ではない授業においては、人格をチェンジすることを意識してみると、雰囲気は全然変わるんですよ。本当にびっくりするくらい雰囲気が変わって、さっきの僕が出した課題なんかも、「こんなの難しい。うちの学生多分無理だわ。」と思うかもしれませんが、最初の1、2回で、「あ、こういう授業なんだ。」とわかってもらえれば、教える側の想像が上回るものがいくつも出てくるんですよ。そういうものをまた拾って、紹介して、シェアしていくと、やる気がかきたてられるのか、頑張ってくれる学生が増えると思います。良い傾向が伝染していく感じというのがあると思うので、ぜひやってみてもらいたいと思います。作文教育においては、課題の設定と教室での人格というのが半分以上を占めるなど、日本語教育では思います。

【阿部】 テーマという面では、おそらく日本人の初年次教育の教材との関係でも

共通するような部分があるかなと、お話を伺っていて思いました。

私も少しと言いながらたくさん話してしまったので…、今日お集りのみなさまで、ご質問やご意見があれば、あるいは、前半のお話の中で、どんな課題を出すか考えてもらうという課題テーマがありましたよね。例えばこんな課題はどうでしょうか、といったようなご発言をしていただければと思います。手を挙げなくてもかまいませんので…。

【安部】 そう！僕の授業では、意見を言うときに、手を挙げなくてもいいと言っています、そう言えば。手を挙げるのって、結構ハードルが高いじゃないですか。

【阿部】 それは、私も授業で言っています。

【安部】 あ、やはりそうですね。

【阿部】 私が大学生のときに参加していた選択科目のセミナー（ゼミ）の先生がそうで、「手を挙げて言わなくていい！」とよく言ってました。

【安部】 なんでもいいですよ。成功例とか失敗例を聞かせてもらうと嬉しいですけど。

【質問者①】 すみません、質問！

【阿部】 はい、質問でも結構です。

記録の関係がありますので、ご所属とお名前をおっしゃってからご発言ください。

【太田（質問者）】 明星大学の明星教育センターで教員をしております太田と申します。よろしくお願いします。

実は別の大学で、1日講座で、1日4コマでレポートの書き方を教えるという

のをやっております。

【安部】 うわ、大変だなあ、4コマですか？。日本人を対象にですか？

【太田（質問者）】 はい、日本人です。通信教育の学部ですけども、そこで、引用の仕方はレポートを書くうえでは絶対必要なので、引用の仕方を練習させるのにいろいろ工夫をしていますが、なかなか上手くいかないことがあります。課題文を決めてこの中から引用しなさいと言ったら、その課題に興味がある学生はいいんだけど、興味の無い学生はどこをどう引用していいのかわからなくなってしまいうんですね。今考えているのは、いろいろなジャンルからいろいろな短い文章を並べて、その中から好きなものを引用して、引用したものに対して自分の意見を書こうという構想はしているんですけど…。引用の仕方を教える何かいいやり方はありますでしょうか。

【安部】 はい。その場合の引用というのは、文型ですかね。「○○によると○○ということらしい。」という引用なのか、それとも引用そのものということですか？

【太田（質問者）】 形式的なことも含めてです。

【安部】 なるほど。それだと、まず、1つの事柄に対して、いろんな意見が出そうな問題を見つけるんですよ。例えばなんだろう…、学校でやる課題に相応しいかどうかわからないんですけど、じゃ、例えば、浮気がいいかどうかとか。さっきのたばこでもいいのですが、あるいは死刑とか。で、それについて既に述べられている意見を、例えば5種類くらい用意するんです、テキストで。で、この5種類の文を読んで、あなたの意見をまとめなさいでもいいと思います。そうすると、その5種類の文章を編集して、これに関してはこの人がこういうことを言っているという、これは引用の仕方として教えるわけですよ。この5種類の文章の中から最低2つを引用して、自分の意見を述べなさいという課題だと上手くい

くんじゃないかなと思います。

僕は、基本的にはいくつかの種類、このパターンだと、『最強の動物』という課題を都合2回やってもらうんですけど、1回目に、それぞれ1メートルにしたときに強い動物を考えてくるわけですよ。例えば、さそりが強いんじゃないかとか、鷲が強い、トラが強いという人たちがいて、他の人たちの意見の中から2つ引用して反論しなさいという課題を与えています。ですから、「自分が選んだ動物がこの動物と戦った場合、彼のレポートではこういうことが書かれていますが、私の考えだとこういう反撃が可能だと思うので負けないと思います。」というようにやってもらっています。この場合、他の人の意見を読みながらそれを引用し、前の課題でやったもので、みんなが書いたものを引用させるというやり方だと、自分と同じ立場にいる人たちから出た意見なので、わりと生々しく考えられるんじゃないかなと思います。いかがでしょうか。

【太田(質問者)】 ありがとうございます。

私もいろいろな討論の授業をやってみて受けたこともあって、その中で一番面白かったのが、4種類の動物の中で最強なものを1つ自分が選んで、他の3つを…、

【安部】 反論してということですか。

【太田(質問者)】 そうです。トカゲとか鳥もあつたし、昆虫とかいろいろあって、1つを選んで他を反論するというのがすごく盛り上がるんですよ。それをやることは、書く動機づけにもなるんですか。

【安部】 そうですね。僕の場合は1メートルに体長を統一するのがミソで、全て思考実験になるということなんですよ。もともと5メートルだったものが1メートルになったら弱いんじゃないか、という理念がそこに出てくるわけですよ。いや、でもそんなことないかも、と。大きいものが小さくなるよりは、小さいものが大きくなった場合を考えてみてください、と。「蟻と主張している人がいますけど、蟻の体長が100倍になったら、体重は何倍になると思いますか？蟻

は、多分自分のことを支えられませんよ。」みたいな反論が可能になってくるので、反論するポイントが増えるんですよ。決着はつかないのですが、反論する技術はとて身につきやすくなるので、なるべくあまり白黒はつきりつかない課題の方がいいかなとは思いますが。

【太田（質問者）】 それで、今お話を伺ってちょっと迷っているんですが、やはり難しい課題を考えちゃうんですね。法学部の学生なので、『夫婦別姓についての賛否』というのを課題で出そうとするんですよ。だから、もう少しゆるめることで、いくつか、先生がおっしゃられたような4つか5つか、意見がわかれそうなものを提示して、それは架空のもので、「Aさんはこう言っている。Bさんはこう言っている。」という、例えば2つから引用して自分の意見をまとめなさい、みたいなことを考えると、上手くいくんじゃないかなということですね。

【安部】 はい、そう思います。

【太田（質問者）】 ありがとうございます。

【安部】 ありがとうございます。

【阿部】 他にいかがでしょうか。もちろんご質問でも構いませんので。

【安部】 今の話について、阿部先生どう思います？

【阿部】 実は、朝日新聞の『声』欄に、月に1回程度『どう思いますか』というコーナーが掲載されるんですよ。このコーナーは、まさに今の話に近いのですが、『声』の欄に掲載された投書に対して寄せられた意見が、1ヶ月後くらいに4人程度掲載されるんですよ。

【安部】 投稿欄の比較は面白いですよ。

【阿部】 そうなんです。『声』欄に掲載された投書に対して4人ほどの意見が載っていて、その欄の下には専門家のコメントが載っているというコーナーが、月に1、2回程度ですが掲載があるのです。実は、今年度の授業で使ったのですが、例えば、『子どもに無断で触らないで』という投書がありまして…。ベビーカーに乗っていた自分の子どもを、初老の人が「かわいいね」となでようとした。で、その主婦の人、母親は、とっさに「やめてください」という感じで手を払った。そうしたら、その初老の人がその場から立ち去って少し離れたところで、「別にそんなむきにならなくてもいいじゃないか」みたいな愚痴を聞こえるように言っていた、という投書が掲載されていたんですよ。その投書に対して、どちらがよいか、賛成・反対じゃないですけど、4人ほどの意見が掲載されていて…。それで二元論で考えさせてしまうのですが、「じゃ、あなたは賛成・反対どちらですか。4人の文章をもとにして書きなさい。そこに書かれていること以上の知識や、調査、検索して情報を得ることは必要ありません。」というようにして、800字だと少し難しいでしょうから、400字程度ならさらっと書けるかなと思って課したことがあるんです。

【安部】 それって、「でも、僕この人の意見に完全同意です。」で終わっちゃう場合どうしますか？

【阿部】 ありますね。そういう場合には、同意するとしても必ず反論を書きなさいという、先ほど私が述べた脚本の「箱書き」じゃないですけど、反論の欄を設けて、ここに必ず反論を埋めなさい、みたいな形で、ワークシートというかノートを作らせて、最後に清書させる。実は、今年度は、つまらない文章しか書けなくなるかもしれないのを覚悟して、文章の書き方をかなりがっちり型にはめてやらせるという実験をやったんですね。そうすると、成城大学の学生は言うことをきちんと聞くという意味では素直なので、型にはめた文章はきちっと書けるわけです。ただ、やはり文章自体を書き慣れていないので、パラグラフの中のセンテンスを綴るのが上手くないかないというのはありましたね。

【安部】 それは、つなげないということですか？

【阿部】 何を書くかというテーマはあっても、パラグラフの中のセンテンス同士の関係を上手く作れない、綴れない。でも、それは教員がパラグラフライティングの技術を教えて導かなければならないかもしれないのでしょうか…。

【安部】 接続詞が上手く使えないということですか？

【阿部】 まあそうですね。例えば、パラグラフライティングの方法にある、パラグラフの頭にキーセンテンスがあって、それを受けて具体的な例があって…みたいなつなげ方、綴り方が上手くいかない。だから、今年度の授業では、私はパラグラフもセンテンスも型に着目して指導していました。パラグラフライティングについては、英文学科の学生はどうも専門の授業で習っていたらしく、パラグラフライティングを意識した書き方をしていました。

【安部】 でも、そういうやり方だと、逆に反論しやすい文章を選ぶという現象が起きないですか？

【阿部】 起きてきますよね。だから、そこがネックでして…。テーマの選び方というか、『髪は黒でなければいけないか』のような身近でわかりやすいテーマを拾ってくるのですが、オリジナルではなくて、たまたま新聞に載っていたものをそのまま拾ってきたので、私も選び方を考えないといけないなと、今日のお話を伺っていて反省しております。

すみません、口をはさんでしまいました。他に今のようなご質問でも結構ですので、今日お集りの方々で、何かご質問等あればこの機会に是非出していただければと思いますが、いかがでしょうか。

【小河原（質問者）】 安部先生の『ヘンな論文』を拝読しました。

【安部】 ありがとうございます。先ほど、文芸学部の南保輔先生が会場にいらっ
しゃって、南先生の論文も『ヘンな論文』とは別のところでですが紹介したりして、
取り上げた論文の著者に会うのはちょっと恥ずかしいなと思ったんですけど。

【小河原(質問者)】 声を上げて笑いながら読ませていただいて、面白かったです。

【安部】 ありがとうございます！

【小河原(質問者)】 成城大学の WRD の授業で非常勤講師をさせていただいて
いる小河原といいます。

『ヘンな論文』の最後にある「あとがき」で、問いの重要性みたいなことを面
白く書いていましたが、授業の中では問いを引き出すというようなことはなさっ
ていますか？

【安部】 学問って、問いに学ぶという話ですよ。一番大事なのは、問いを見つ
ける作業なんだという話を本のあとがきに書いたんですけども。これはみなさ
ん研究者だったら誰しも経験のあることだと思うのですが、例えば、自分の研究
について、先行研究でまだ着手されていないくて、しかもやる価値があるものを見
つけるまで、結構時間がかかったと思います。学生にもそういう問いを見つける
面白さを見つけてもらいたいと思って、上級後半の学生には、クラスで相談して、
最後みんなで書く課題を考えてもらうというのをやっています。これは、一度試
験を受ける側じゃなくて、試験を作る側に回ってみればわかることだと思うん
です。僕も何度か試験を作ったことがあります。私はとある出版社の入社試験を作
ったことがあるのですが、問いを作るという作業をすることで、同じ条件でいろ
んな人を審査するとか、何かを書いてもらうときに必要なものがわかってくる
と思うんですよ。国語の試験だって、作ったときに答えに至る明確なプロセスを説
明できなければ、「なんでこれが正解なんですか？」と言われたときに困っちゃ
うじゃないですか。だから、それをみんなにきちんと説明できるように、「なぜ
この課題にしたのかがわかるような課題をみんなで考えなさい。」と言って、最

最終的に書いてもらうということをやっています。それが、じゃ、今まで有史以来人間が全く考えたことがない問いなのかどうかというのは…、学術的な場での話ですが、僕はマスター1年の学生の指導をしたことがあるんですよね。日本人と留学生の大学院生のマスター1年対象の授業で、論文を書く技術みたいなのを教えたことがあって、そこでは、先行研究を調べて、自分が取り組んでいる研究で、先行研究の中で既にやられていることはどれなのか、みたいなことをやったりもしましたけれど。そういう問いを自分で作ってみるというのは、やってもらっています。

その中で出てきたのはね、「恋人の携帯を見ていいかどうか？」というもので、なんか若者っぽいなと思ってね。でも、海外の学生は、携帯云々というよりは、プライバシーに対する考え方がアジアの人と決定的に違うなあとあって、そんなのは見た時点で即別れると。プライバシーを何だと思っているんだという、そういう議論にもなったりして面白かったです。中国では見て当たり前みたいなことを言っていました。そんな感じですかね。

質問、ありがとうございます。

【阿部】 問いを見つけるというのは、さっきの「課題を見つける」ではないですけど、根本的なところというか、特に大学生に関して言えば、さっきの「学校人格」の否定という話とも絡むんでしょうけれど、物事に対する興味関心が無いところに、まず自分で何に関心があるのか、何が面白いと思うのかということ自分で考えられるかがとても大事で、本学の WRD という科目はそういうところから始めようというコンセプトでやっているわけです。これは教える側もなかなか大変ですけども…。

【安部】 今おっしゃっていただいた『ヘンな論文』でやろうとしていることは、実は、この本は高校生や大学生に読んでもらいたいなと思っているのですが、今、自分が興味あることと学校で学んでいることは連続的なものなんだ、ということを知ってもらいたいということなんですよ。例えば、ゲームは好きだけど学校の勉強は嫌いという子でも、実は好きなゲームのことは学術的に極めることも可

能なんだ、ということを知ってもらいたい。今自分の身の回りにあることだって、どんなものでも学術的な対象になるし、その切り口を大学で学ぶんだよというようなことを、偉そうに僕は語っているんです。そんな偉い存在ではないんですが…。問いを持つことの大切さとは、どの領域にも共通して言える大事なことなんじゃないかなと思います。

【阿部】 それはおっしゃる通りだと思います。今おっしゃられたように、大学で学ぶことは、内容はともかく、自分で問いを見つけてそれについていろんなことを考えることだと。先ほどの話にあるように、堅苦しいテーマでなくてもいいんだ、ゲームでもいいんだと。そういう態度というか、モチベーションというか…。これは、まさに私が学生によく言っていることですが、「企業に就職するから、大学で学ぶことは何もない。学問は必要ない。」とか、「高校までの学習は大学受験のための学習であって、高校までの学習に将来役立つ内容はない。」という考え方は間違いだということを、本当は大学で教えなくてはいけなと。また、「高校まで学んできた内容は、むしろ間違っているんだ。」という、教科書に書かれている「常識」を疑うことも教えるのが大学だと思っています。

【安部】 そうなんですよ。大学でもそれをやらないところが多いので、学部で卒業しちゃう人って、ほとんどが「学問というのは暗記」と思っているんですよ。実際、暗記で済んでしまう部分もあるし。作文も、現代文の試験でいう記述問題の延長線のものとしか思っていないので、つまらないものだと思っちゃっているんですよ。そうじゃない。もっと日常生活に密着したものだし、例えば、LINE グループで送る文章と、個人でやっている LINE とでは書き方が変わるとい現象を、今ここでやっているんだよと紐づけてあげることは、とても大事なことじゃないかなと思います。

【阿部】 そういう意味では、社会が求めている人材能力、コミュニケーション能力をはじめいろいろ言われていますが、大学での学びで実践していること、すなわち文章を書く、思考するという学びの実践に、社会が求めている能力のエッセ

ンスが全て詰まっていると私は思っています。最近、大学では、簿記だけ教えておけばいいとか、字の読み方を教えておけばいいとか、観光案内ができる英会話だけ教えればいいなどと、国の教育政策にまつわる会議でよく言われていますが、私は、そういうことに対して「違う！」という考えを持っています。

【安部】 技術だけ学べばいいというものではないですね。

【阿部】 そういう話にもつながるのかなと、ちょっと思っていました。

【安部】 本当に、そういう意味では、表現教育というのは大事なものというか…、僕は、学問と生活を結びつける橋になればいいなと思っているのですが、どうしてもそこを分離したものとして捉えられていて、誤解されがちですよ。そういう意味で言うと、表現教育に携わる先生に課せられた責任というのはとても重くて、もっと言うと、どういう課題を書いてもらうのかを考えることって、実は添削の作業とか文法を教える作業よりも大事な作業なんじゃないかなと思っています。なので、僕は、休み期間中に、次のセメスターの学生にどんな文章を書かせるかなということがずっと頭にあって、それを考えるのが楽しみでもありますね。

【阿部】 ネタ探しは非常に苦労しますよね。

【安部】 ネタ探しが大変ですよ。だけど、これは決して職人芸でもなんでもなくて、誰でも習慣づければできることだと思うし、学生たちが授業を終わった後、休み時間に生き生きしゃべっているのに、口頭表現ではしゃべってない現象って、必ず起きるわけじゃないですか。それっておかしいわけで、それだったら授業として口頭表現をやっていることの矛盾がどうしても出てきてしまいますよね。フォーマルなしゃべり方を教えるというのは、とても大事なことかもしれませんが、そもそも口頭表現の授業でも、友だちとしゃべっているようなものの延長でしゃべるんだよということを、なんとかしてそのような空間自体を作り上げていけないかというところからやっているって感じですかね。

【阿部】 ありがとうございます。

まだお時間がありますけれども…、ではどうぞ。

【久田 (質問者)】 名古屋にある大同大学というところから来ました。初年次教育と、学内のFD活動のいろんな仕事をしているんですが…、初年次教育で、いわゆるスキルだけを身につけるような授業をやっているわけなんですけど、学内でそれなりに内容を統一してやっていて、それはそれでいいと思いつつ、限界も感じて、今回このワークショップに参加させてもらったんですけれど。

【安部】 何単位でやっていますか？セメスターですか？

【久田 (質問者)】 半期で15回の授業です。我々は、昔の教養部と同じような組織を作って、そこの教員22名が全員で担当しているんですけれど。

【安部】 いわゆる国語の時間ということですね。

【久田 (質問者)】 いや、書くだけではなくて、授業のノート作りからですね。くろしお出版の『知へのステップ』というテキストをそのまま使うという形ですね。その話はちょっと置いておいて、僕自身もこの「表現教育の可能性」というこの題に惹かれて来たんです。今日はもう目からウロコだったんですけれど、実はもう1つやはり重要なこととして、もう1つ別の角度から実践されている方が別の大学におられて、帝塚山大学の谷美奈さんという方で…、

【東谷】 去年のこのワークショップに来ていますよ。

【阿部】 谷美奈先生は、去年のFDワークショップで講演をされています。

【東谷】 このワークショップでは、わりかし通好みの人を呼んできています。任せてください。

【久田(質問者)】 谷さんの実践は、表現教育を通して、いわばアイデンティティーをどう形成していくかということにかかってくるかなという思いがあるんですね。なぜそんなことを言うのかというと、うちの大学の場合ですが、自分が教えている学生にアンケート調査をすると、小中高校の間でいじめられ体験がある学生が、42パーセントいるんです。そして、いじめ、いじめられ、傍観者、この体験が無い学生は、15パーセントしかいないんです。ほとんどの学生がそういう体験を経てきているので、最初から他者に対する否定感だとか怖さみたいなものを持っているんですよ。大学では、それをいかに解きほぐすかということも同時に要るんじゃないかと。で、彼ら自身ももっと伸び伸びと学んでいけるためには、初年次教育も大事だけれども、表現教育にもそのための可能性があるんじゃないかという思いがあるわけですね。それで、谷さんの実践に出合ったときに、あ、これはすごいなと思ったわけです。で、比較して大変申し訳ないんですけども、今、僕、新たな科目を立ち上げることを考えているのですが、どっちをやるのかなという思いがあります。両方をやると、中途半端になってしまいそうだなと思いつつ。先生ご自身が表現教育の実践をされながら、学生たちのアイデンティティー形成とか精神的な発達だとか、そういったことを感じる場面というのはありますでしょうか。

【安部】 はい、もちろんそれはあります。特に海外の留学生なので、自分の国と向き合うということと、自分と向き合うということの2つの作業が、多分、最終的には重なってくると思います。なおかつ序盤にはネットを探しても出てこない、本にも書いていないことを課題に出しますので、自分だったらどうするんだろうということ、リアルに自分の問題として書いてもらうことを心がけています。

例えば、本当に知らない人にお金を借りるとか、親にお金を借りるメールを出しなさいとかでも同じことだと思うんですけど、自分の悩みそこで何とかするしかない状況に追い込めば、自分で何とかするしかないですし、それをクラスでシェアするとなると、「あ、この人こういうことを考えていたんだ。自分はちょっと足らなかったな。」と振り返ることもできるので、授業では、良かった回答はシェアしますと最初に宣言してはいますが…、そういった形で、自分の力でなんとか

するしかない状況と、シェアをするという環境を整えれば、頑張らざるを得ないと思います。

貴重なお話、ありがとうございます。

【阿部】 ではもう一方…、どうぞ。

【山本（質問者）】 成城大学で教えております山本と申します。今日はありがとうございました。

ちょっと違う球を投げようと思うんですけど…。さっき、本学の阿部先生がコミュニケーション能力の話やアクティブラーニングの話がされていたので、ちょっとそれらの話題からボールを投げたいんですけど…、「学校人格」ってとても面白い言葉で、僕が大学生だった頃の「学校人格」って、確かに先生が言っていることを勉強する結構パッシブな主体ですよ。でも、最近は、アクティブラーニングとかコミュニケーション能力ということが盛んに言われて、もっともっとクリエイティブで、どんどんコミュニケーションをしてアクティブな主体になりなさいと呼びかけられていますよね。だから、「学校人格」自体が、そのように呼びかけられている方向へスライドしている可能性はないのかということが一点。それから、企業が求める人材が、8年連続コミュニケーション能力のある学生となっていますが、このことでものすごく疲れている学生がいるという現実があつて…、要するにもうコミュニケーションしたくない、アクティブでありたくない。企業に求められている人格と自分は合わないかもしれないと、心を病む人たちが出てきている。表現したくない、関わりたくないという。

【安部】 はい、はい、ツイッターにも鍵をかけています、みたいなね。

【山本（質問者）】 はい。それで、筑波大学にたまたまコミュニケーションを断ち切るという授業をやっている人面白い先生がいて、この人は、広間に学生たちを寝かせて、30分くらい何もしない、スマホも持たない、議論もしない、それによってコミュニケーションを断ち切ることが何なのかを体感させる授業を

しているんです。「あ、こういうこともあるんだ。」と。表現に溢れていて、クリエイティブに溢れだしている今、それが学生たちへの新しい負荷になっているとしたらどうなのかなという、ちょっと別の角度からの質問です。

【安部】 面白いお話ですね。そうですね、僕が主に教えているのは外国人留学生なので、この国の事情に当てはまるかどうかちょっとわからないですが…、ただ、特に日本では、高校まで大学受験の勉強をして、大学に入るといきなり個性を求められ、知らない間にコミュニケーション能力を高めることを要求されていて、でもモバイルの発達に伴って日々コミュニケーションする機会は僕らより圧倒的に多いはずで、コミュニケーションに疲れているのは確かだと思います。

僕が外国人留学生に、「世の中の全ての人とはみんなに興味が無いんだよ。」というをよく言っています。みんなは、自分が誰なのかを自分の言葉で説明しないことには誰も興味を持ってくれないし、「だからこそ読む人のことを考えて発信しなくてはいけないよ。」ということをやったりもしています。ただ、僕のクラスにはいろいろな国の人が来ているので、その時点で、日本人学生よりは個性のある人たちなんですよね。特にこのご時世、日本語を選択して日本に留学してくる人たちというのは、言うとなんですが、相当な変わり者です。オタクです、早い話が。歴史オタクか、アニメオタクか、アイドルオタクしかいないと思います。あるいは、親が片方日本人であるとか。そういういびつな環境での日本語教育になってしまっているのですが、彼らはコミュニケーションに関して基本的にストレスを感じていないからこそ、留学できちゃうんですよね。フェイスブックとかみんな当たり前のようにやっていますし、個性を出そうなんて思わなくても、存在していること自体が個性だという考え方の人たちなので、彼らの国では、おそらく「個性を発揮しろ」なんていうスローガンが、そもそも立ち上がらないと思うんですよね。

それで、同じ課題を書いてもらっても、出力してくるものがみんな違うこと自体が個性だと思うので、僕は、「個性、個性」と言い過ぎかなという気がちょっとしております。ただ、それを言いすぎると、「学校人格」の中のコミュニケーション人格をまた立ち上げちゃうというか、「僕はこういうことに興味があって、

それでこの大学に来ました。」みたいなストーリーを1つ作っちゃって、それに求められるキャラクターを作り上げていってしまうというようなことが、実は面と向かったときのコミュニケーション力を下げってしまうとか、平場で戦えなくなる身体になってしまうとか、そういう危険性を感じたりはするんですけどね。ただ、おっしゃるようなコミュニケーションを断ち切るというような意味では、文章表現というのは、自分と向き合う作業とか、内観の作業にも近いので、インターネットで調べても見つからないような問いに対して自分で突き詰めて考えるというのは、結構大事なことかなとは思いますが。すみません、お答えになっていないかもしれません。

【阿部】 「キャラ化」ということに関しては非常にタイムリーなことに、先週の大学入試センター試験の国語の現代文の問題に、筑波大学の社会学の先生である土井隆義先生の『キャラ化する／される子どもたち』が使われていまして、まさに「キャラ化する／される」ことについての文章が出題されていましたがこれも…。

【安部】 今の若い人たちは、本当にストレスがかかると思います。「スクールカースト」の中で「一軍」みたいな言葉もあって、なおかついじられキャラみたいな、役割みたいなものが早い段階からもう決まっちゃって、その役割に合わせたコミュニケーションを磨くだけで、自分のコミュニケーションは磨かないというようになってしまっている。

【阿部】 そうですね。まさに土井先生の文章で、センター試験に出題された箇所にもそのような話がありましたね。それが、例えば、企業に就職活動に行けば企業に求められているコミュニケーション能力を磨くことに手一杯で、それが就活の疲れになると。朝井リョウさんの『何者』という小説では、今話したようなことが主なテーマになっていて、例えば、ツイッターで裏キャラとして友だちのことを馬鹿にしたつぶやきをして、結局それがバレて喧嘩になるという話を書いてあるんですが、まさにその話ですよ。

【安部】 そうなんです。本当はこれ大学で言うべきことではないかもしれないんですけど、裏技になっちゃうのですが、企業が求める人に関して、例えば、「企業の面接の時に、あなたが会社でやりたいことってどんなことですか？」と聞かれるけれども、あれは全部嘘だよ。」とっています。「あれはそのテーマに対してどう回答するかという大喜利だよ。」という説明をしているので、「今、面接でやりたいことを言って会社に入ったとしても、やりたいことなんかできないよ。あれ、採用する側のロジックだからね。世の中、ほぼ全てそれで動いているからね。」と教えています。

【阿部】 あ、それは素晴らしい。「大喜利」というのは目からウロコです。

【安部】 「やりたいこと大喜利」だから、みんなと同じことを言っちゃいけないよと。僕が早稲田の第一文学部を受験したときの話ですが、その当時、早稲田の第一文学部の入試は、国語と小論文と英語しかなかった時代で、社会が無かったんですよね。それで、僕が受験した年は、小論文に、「歴史上の人物に現在を語らせなさい」という課題が出題されて、その年は確か田中角栄が亡くなった年だったのですが、僕が入学した後に、ある先生が「田中角栄って書いた人はみんな落とした。」と言っていたのを聞いたんですよ。だから、「1人の人が読んで大勢の人が書くタイプの文章で、みんなが選びそうなものを選んだら、その中で受かるのは1人だけだよと。田中角栄のフォルダで一番優秀な人が受かるだけだから、もっと違う人を選ばなきゃ。」っておっしゃっていたのを、すごく強烈に覚えています。っと、これって言っちゃいけない話だったのかもしれないんですけど。

【阿部】 いやいや、大勢受ける受験小論文はまさに「大喜利」で、ネタを他の人とどう差別化するかという問題なわけですよ。

【安部】 だから、コミュニケーション能力って、大人が言っているコミュニケーション能力も、実際に人と対峙したときのコミュニケーション能力と、会社の中のコミュニケーション能力、「会社人格」のコミュニケーション能力って全然違

うじゃないですか。そういう社会の成り立ちはなかなか教えられないし。僕は、相手が外国人であることをいいことに言っているだけなんですけれど。

でも、グーグルの入社試験とか難しいですよ。それなりに、いろいろな総合力が試されるような問題を考え抜いてある。あれって、グーグルの社員が、文章表現の課題を考えるのが上手い人たちっていうことだと思うんですけど…、そういうことを考えたりしました。

【阿部】 日本人の学生にも当てはまることかなと思います。

【安部】 全部建て前をどう消化するかというプロレスなんですよ。大人が仕掛けているプロレスなんだから、っていうね。でも、誰かがどこかのタイミングで教えなきゃいけないよなと思っていて。本当に夢が叶う社会だと思っている人が結構多いから…、夢の無い話で終わっちゃいましたけれど。

【阿部】 今の話題も発展しそうなことがいろいろ含まれていて、とても興味深い話題ではあるのですが…、今日はお集りの方々にも積極にご発言いただきながら、充実した討論が展開できたのではないかと思います。終わりの時間も近づいてまいりましたので、この辺でワークショップを終わらせていただきたいと思います。

【安部】 今日は本当にお寒い中、ご足労ありがとうございます。

【阿部】 最後に、本日のFDワークショップを主催しております本学共通教育研究センターのセンター長であります相澤正彦先生に、ご挨拶をいただきたいと思えます。

【相澤】 相澤です。安部先生、今日はどうもありがとうございます。

議論が白熱したところで、これでお開きというのはとても残念ですが…、今、アクティブラーニングなどと言われますが、私は、大学に来て、大学の先生の話

だけを聴いて、それを家で思い返して何となく自分の思いを馳せるっていうのもいいものじゃないかなと思ったりするんですが、そんなことを言うとセンター長をクビになってしまうので…、クビになってもいいんですけど。教育の現場でもそういうようなことがあって、いろんな型にはめられることがあるのかなと、むしろ型にはめていくことを考えなきゃいけないところもあると思います。

成城大学のFD活動はいろいろな部署でやられているのですが、共通教育研究センターのFDワークショップは、これまでも出版社の方とか、元ミュージシャンの大学教員とか、いろいろな経歴の方に来ていただいておりまして、今回の安部先生はいろいろな経歴を経つつというか、現在進行形で芸人という仕事もされながら、それでいて表現教育のこともなさっているということで、何かサプライズみたいなものがあるのかなと思っただんですが、それは無くて良かったのかどうなのかというところがありますけれど…、本当に貴重なお話をいただきましてありがとうございます。私は、授業を段階的に進めていくためには服装も変えなきゃいけない、というお話に感銘を受けました。本当にありがとうございました。

それから、今日はぜひぶん遠いところから来ていただいた方もいらっしやって、これにも大変感謝しております。やはり、みなさん、様々な悩みを抱えていらして、教育というのは、学生相手、人間相手ですから、マニュアルがあるようで実は全く無いところから試行錯誤していかなければいけないという現状に、お集まりのみなさんが立ち向かっているということ、しかしそれだからこそ、みなさん自由に発言してもらって支え合うというわけではないですが、これからの教育実践に役立てていくには、このようなワークショップが一番いいのではないかなと思います。本センターではこれからもワークショップを続けていきたいと思っていますので、みなさんどうぞよろしくご協力のほどお願いいたします。本日はありがとうございました。

【阿部】 相澤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のワークショップ、予定通りの時刻ちょうどに終了となりますが、本日講師を務めていただきました安部達雄先生に盛大な拍手をもって感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

【安部】 教員も芸人です。人前に出て話す以上、芸人なんです。タレントなんです。それを忘れないでください。以上です！

【阿部】 ありがとうございます。私も忘れないようにしたいと思います。

では、本日のFDワークショップ、これで終了したいと思います。お集りのみなさま、どうもありがとうございました。

【完】